

平成17年度マスターセンター補助事業

「開業20年を迎える盛岡手づくり村」 に関する調査研究報告書

平成18年 1 月

社団法人 中小企業診断協会岩手県支部

は じ め に

この「調査研究報告書」は平成17年度マスターセンター補助事業の一環として、社団法人中小企業診断協会岩手県支部が中心となり、財団法人盛岡地域地場産業振興センター、並びに協同組合盛岡手づくり村の協力のもとに取りまとめたものである。

盛岡市の郊外・繋（つなぎ）地区に昭和61年5月に創設された盛岡手づくり村は、岩手県を代表する地場産業の工房を備えた集団化の事例として、全国的に注目を集めた施設である。開業後ほぼ20年を経た現在においても、なお各地からの視察団の来訪が続いている。

手づくり村の設立目的について、盛岡地域地場産業振興センターがまとめた「概要書」に次のような記述がある。

- ① 地場産業の振興及び育成
- ② 地場産業に係る関連産業の振興
- ③ 地場産業と地域住民の相互交流並びに地域文化の振興

盛岡手づくり村の構想が持ち上がったのは昭和49年のことであったというから、実現するまでに12年の歳月を要している。設立推進準備会が設立された昭和56年には、参加希望企業が25社あったが、開業時には14社でスタートしたことから見ても、いろいろな紆余曲折を経てきたであろうことは想像に難くない。この間の国、岩手県、盛岡市をはじめとする行政、商工団体、地場産業同業組合など関係者の熱意と、ねばり強い実行力に敬意を表したいと思う。

今年度の調査研究事業に盛岡手づくり村を取り上げることにしたのは、手づくり村が平成18年5月に開業20年の節目を迎えることになるので、開業後の歩みを辿りながら、さらに今後の目指すべき方向性について提言をしたらどうかとの思いがあったからである。

最近の盛岡手づくり村にとっての課題の一つとして、入場者の減少があげられる。詳しくは本文（第4章）に譲るが、たしかに入場者が減少することは施設そのものの存在価値を低下させることにもなる。しかし、先にも述べたとおり、盛岡手づくり村は本来地場産業の生産設備の集合体であるから、純然たる観光施設とはやや赴きを異にしていることも確かである。ここで生産された製品の多くは、いろいろな媒体を経由して広く販売されている。さらに、通信販売もある。

一方、開業後20年間の実績から見て、盛岡手づくり村は今や岩手県を代表する観光施設としての位置づけをゆるぎないものにしている。当初の設立目的には、観光地としての側面があまり重要視されていなかったとはいえ、そのことにこだわっているわけにはいかない。もちろん各工房での直接販売や展示即売室での販売もあるから、できるだけ多くの団体客や家族連れなどに足を運んでもらうことが、手づくり村の振興には欠かせない。多くの人たちに手づくりの現場を見てもらい、あるいは手づくり体験を通じて、その場で製品を買ってもらうことが盛岡手づくり村の真の目的であると考えるべきではないだろうか。

今回の調査研究は、盛岡手づくり村の「現状と課題」及び「今後の展望」を述べることに主眼を置いたが、併せて、15工房の紹介にも大きく紙面を割いた。これは、当支部の5名の会員が、それぞれ手分けをして代表者にインタビューしてまとめたものである。15工房のうち、14工房は盛岡手づくり村開業当時の企業であり、つい最近入居した1工房を加えた15企業が、手づくり村の発展に力を合わせて取り組んでいる。

特筆すべきことは、20年間に撤退した工房が1件もないことである。バブル経済破綻後の長引く不況に耐えて、ここまでがんばり続けてきたことに心から敬意を表したいと思う。

この報告書は、本文が6章構成となっている。第1章から3章までは、盛岡地域地場産業振興センターに執筆を担当していただいた。第4章から6章までは当支部が執筆した。第6章の執筆に当たっては、協同組合盛岡手づくり村にインタビューの日程調整など、全面的にご協力をいただいた。それぞれお忙しい時間を割いてご協力いただいたことについて、誌上を借りて感謝の意を表したい。

平成18年1月

社団法人中小企業診断協会岩手県支部

平成17年度調査研究事業委員会

委員長 宮 健

委 員 斎藤 静夫

〃 森 肇

〃 山火 弘敬

〃 吉田 匡

執筆協力

財団法人盛岡地域地場産業振興センター

取材協力

協同組合盛岡手づくり村

も く じ

はじめに

第1章 盛岡手づくり村の概要	3
第2章 設立の経緯	11
1. 構想づくり	11
2. 構想実現への機運	11
3. 建設計画から着工まで	11
4. 工房の取り組み	12
第3章 開業20年の主な歩み	17
1. 昭和61年度～平成2年度	17
2. 平成3年度～7年度	17
3. 平成8年度～12年度	18
4. 平成13年度～17年度	19
第4章 盛岡手づくり村の現状と課題	23
1. 盛岡手づくり村への入場者数	23
2. (財)盛岡地域地場産業振興センター施設の利用状況	24
3. (財)盛岡地域地場産業振興センターの活動状況	27
4. (財)盛岡地域地場産業振興センターの収支状況	32
第5章 今後の振興に関する提言	35
1. センター機能強化のために	35
(1) 地場産業振興のための本来の業務の見直し	35
(2) 委員会活動の活性化	35
(3) 手づくり村（工房）の魅力を高める	36

2. 入場者数の増加と売上増進を図るために	36
(1) センター施設の改善	36
(2) 周辺の観光地との連携	37
(3) 修学旅行者への対応	38
(4) 外国人観光客への対応	38
(5) ウェブマーケティングの充実	38

第6章 盛岡手づくり村工房の紹介 40

1. 虎山工房（株式会社南部鉄器販売）	40
2. 有限会社染屋たきうら	42
3. 有限会社盛岡せんべい店	44
4. 北杜窯（ほくとがま）	46
5. 有限会社薫山工房（くんざん）	48
6. 金田一製菓	50
7. 有限会社藤枝工房	52
8. 田中絃（つる）工房	54
9. 有限会社菓子工房	56
10. しばた工芸	58
11. 合名会社照亦製作所	60
12. ぴよんぴよん舎冷麺工房（株式会社中原商店）	62
13. 有限会社中千家具製作所	64
14. みちのく工房	66
15. 雫石民芸社	68

おわりに	70
------------	----

第1章 盛岡手づくり村の概要

第1章 盛岡手づくり村の概要

盛岡手づくり村の概要は、以下のとおりである。

(1) 所在地

〒020-0055岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

(2) 盛岡手づくり村の施設の概要

盛岡手づくり村は、盛岡地域地場産業振興センター、手づくり工房群、南部曲り家の3つの施設の他に駐車場、公園緑地などから成り立っている。これらを総称して「盛岡手づくり村」という。

(3) 財団法人盛岡地域地場産業振興センター

盛岡手づくり村は、財団法人盛岡地域地場産業振興センターが運営している。理事長は代々盛岡市長が務め、岩手県をはじめ、盛岡広域圏の市町村長、商工団体の代表者、地場産業関係組合の代表者などがそれぞれ理事、監事、評議員に名を連ねている。

(4) 財団法人盛岡地域地場産業振興センターの施設内容

- ・敷地面積 6,273.64m²
- ・建設面積 3,591.688m²
- ・構造 鉄筋コンクリート、地下1階、地上2階

① 第1技術研修室

1 F／面積150m²（木工・金工・陶工）

〈主な付帯設備〉作業台7台、電動ロクロ・手ロクロ80台、陶焼窯他

② 第2技術研修室

2 F／面積150m²（ホームスパン・染め物）

〈主な付帯設備〉織機10台・紡毛機10台他

③ 第3技術研修室

2 F／面積150m²（食品）

〈主な付帯設備〉調理台7台・オーブン・ミキサー・冷凍冷蔵庫他

④ 多目的ホール

2 F／面積203.75m²

用途に応じ3つまでスペースを仕切ることができる。収容席数25席から140席

〈主な付帯設備〉 マイクロホン・ワイヤレスマイク・映写機他

⑤ 展示資料室

2 F／面積390.4m²

見学科100円（団体20名以上80円）

観光と産業を紹介するDVDコーナー・うるしと南部鉄器のコーナー・染めと織りコーナー・木の味わいコーナー・文字と印刷コーナー・みちのくふるさと味コーナー・水の都の酒づくりコーナーなどがあり、各コーナーでそれぞれの歴史及び生産工程を名品と共に紹介する。

⑥ 展示即売室

1 F／面積540.7m²

岩手県盛岡地域の地場産品の展示即売をしている。

⑦ 茶室

2 F／面積32.725m²

南部の湯釜を始め地場産品の漆器・陶器の用具を備えており、お茶会等に利用できる。

⑧ 催し物広場

面積3,000m²

インターロッキングブロックが敷かれ、屋外での各種イベントに利用できる。

⑨ その他の施設

食堂・喫茶コーナー／約70席と25畳の和室がある。

駐車場／約160台収容の駐車場（5,441m²）がある。

その他／大型テント10張・可動式販売台数40台

(5) 手づくり工房施設

・敷地面積 7,155.652m²

・建設面積 3.592m²

・建築棟数 7棟（15社入居）

(6) 南部曲り家の施設

南部地方は昔からの馬産地であり、家族と馬が同居する南部曲り家は、当時の生活様式を現代に伝える貴重なもので、民具・生産用具から手づくりのルーツをたどることができる。中に入ると昔からの様々な民具やクラフトが数多くある。また、南部曲り家ゾーンは、来村者の休憩施設としてもご利用いただけるようになっている。

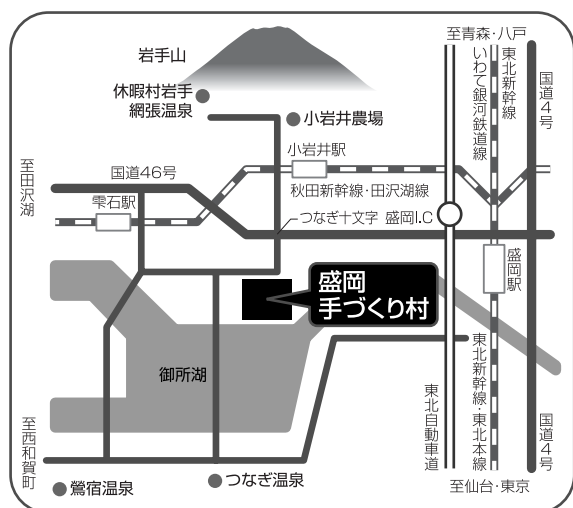
(7) 協同組合盛岡手づくり村

盛岡手づくり村の工房が協同組合を組織し、共通の課題に取り組んでいる。

協同組合のメンバーは次のとおりである。

役 職 名	組 合 員 名	代 表 者 ・ 工 房 名	電 話 番 号
理 事 長	(株)南部鉄器販売	代表取締役 前田 知行	電話 019-635-5761
副理事長	(有)染屋たきうら	代表取締役 滝浦 輝夫	電話 0198-45-3230
〃	(有)盛岡せんべい店	代表取締役 佐々木 俊幸	電話 019-622-6593
専務理事	吉田 勝弘	北杜窯 代表	電話 019-692-0464
理 事	(有)薫山工房	代表取締役 佐々木 和夫	電話 019-659-2313
〃	金田一 博	金田一製菓 代表 ※員外 金田一 克二	電話 019-635-0546
組 合 員	(有)藤枝工房	代表取締役 藤枝 行勇	電話 019-636-0276
〃	田中 二三男	田中絃工房 代表	電話 019-659-3528
〃	(有)菓子工房	代表取締役 佐久山 昌也	電話 019-622-4727
〃	柴田 隆典	しばた工芸 代表	電話 019-686-2347
〃	(合名)照亦製作所	代 表 社 員 出口 宏	電話 019-624-2632
〃	(株)中原商店	代表取締役 邊 龍雄	電話 019-647-0474
組合員相談役	(有)中千家具製作所	代表取締役 中村 千二	電話 019-661-4615
監 事	大森 信政	みちのく工房 代表	電話 019-636-2151
〃	階 美栄子	雫石民芸社 代表	電話 019-692-4132
顧 問	高橋 金兵衛	つなぎ温泉観光協会副会長	電話 019-689-2524

盛岡市中心部からの道路略図



アクセス



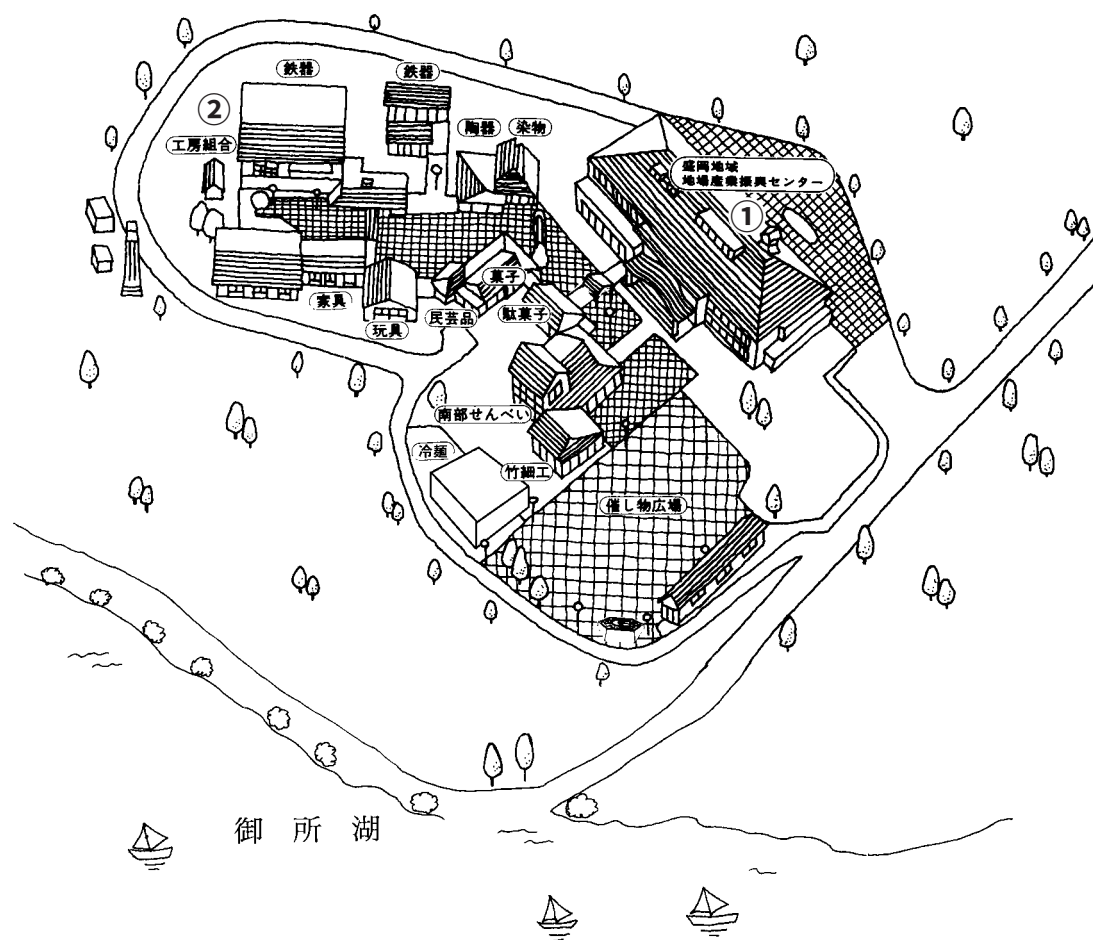
- ・盛岡市内から国道46号を秋田方面に約14km
- ・東北自動車道盛岡I.Cから国道46号を秋田方面に約5km



- ・盛岡駅から、岩手県交通バス繫温泉行き、または繫温泉經由鶯宿温泉行き乗車、所用時間約30分「盛岡手づくり村」前バス下車

施設の全体配置図

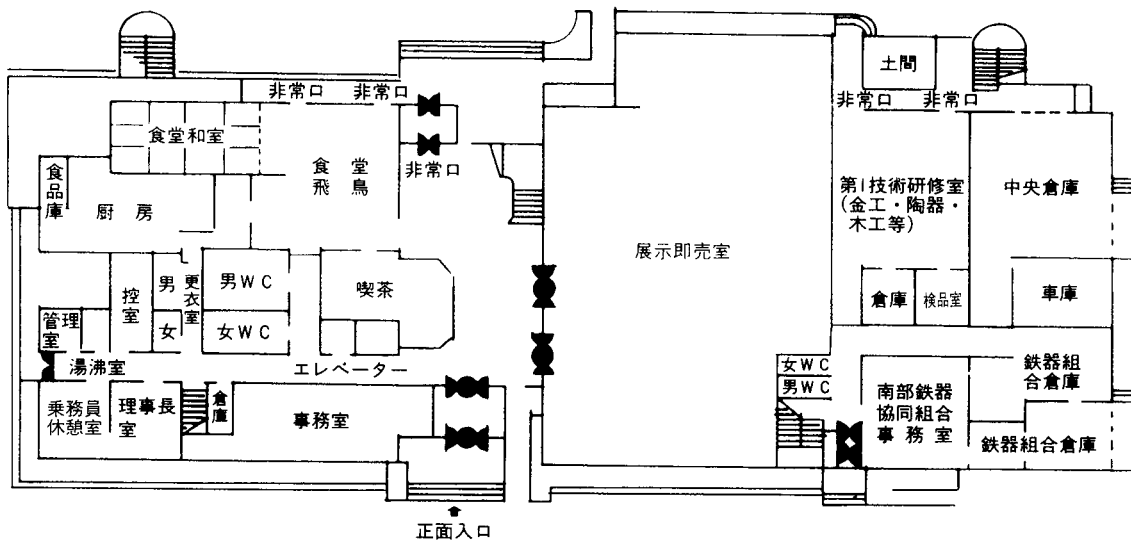
- ① 振興センターゾーン
- ② 手づくり工房ゾーン



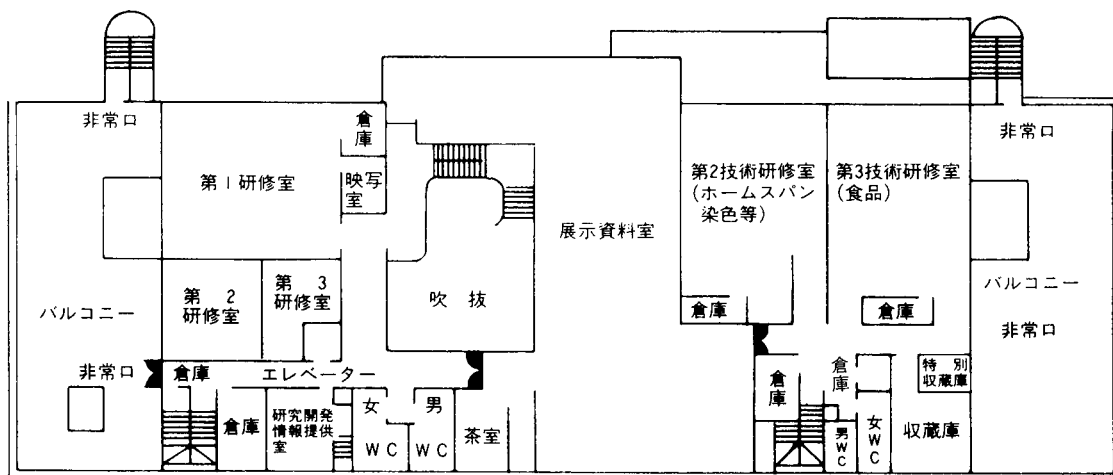
盛岡地域地場産業振興センター施設概要

敷地面積 6,273.64m²
 建設面積 3,591.688m²
 構 造 鉄筋コンクリート地下1階、地上2階

(センター1階平面図)



(センター2階平面図)



第2章 設立の経緯

第2章 設立の経緯

1. 構想づくり

「盛岡手づくり村」の設置は、昭和49年に発表された「X村構想」にはじまる。

そもそもの着想は、市内の特産品関係組合と企業で構成している盛岡市特産品振興協議会が、業界活性化のために、販売促進と観光客誘致につながる展示販売場を設置したい旨を打ち出したことである。

これを東北工業大学の秋岡芳男助教授（当時）らに委託して、構想にまとめた。

「X村」は、面積・施設とも相当大規模な構想であった。その基本理念は次のようにまとめられた。

- ・作り手と使い手が自由交流する。
- ・本物の良さに触れ、制作体験もできる。
- ・個別にも注文（あつらえ）や修繕を依頼できる。
- ・工人にとっても、自然の中で良い創作環境にする。
- ・観光客が無制限に工房に入り込まず、ほどよい交流ができるような接点とする。

2. 構想実現への機運

構想を基にして、業界と盛岡市の話し合いがもたれ、研究が重ねられた。このなかで、資金については中小企業事業団の高度化事業、工場共同利用制度を活用することとし、実現のための具体案として、昭和54年に「盛岡手づくり村構想」を作成し、構想と計画をたたき台に、各方面と検討を加えた。

業界側はメリットとリスクを勘案しながら将来を見通し、一方盛岡市では「構想」に関するシンポジウムを開催して、広範囲な意見集約を行った。ここでは見学させる目的の議論がなされ、「地場産業の振興を第一に本物の魅力で観光欲求にも応えられる施設」の線が打ち出された。この間、数々のアンケート調査を実施すると同時に全国の類似施設の視察を実施した。こうした取り組みを通じて、手づくり村の骨格が固まり、業界の意識形成が進んだ。

3. 建設計画から着工まで

盛岡市の調査において、地場産業の振興に不可欠な点として、経営力強化、技術研修、新製品開発、情報の収集活用が挙げられた。さらに消費者への理解浸透をはかるうえでも、業界ぐるみ地域ぐるみの取り組みが求められ、異業種間交流の必要性が出されていた。

この要請をうけて、昭和57年、施設の中核のひとつとして、高度化事業による地場産業振興センター制度の導入を検討。盛岡市・岩手郡・紫波郡・安代町を対象地域とし、各自治体および業

界団体と協議した。翌58年におおかたの同意を得て、先の地域の行政・商工団体・地場産業関係組合が一体となって、地場産業の総合的な振興計画を策定。昭和59年には「盛岡地域地場産業振興センター建設計画」をつくった。

ここに至って、手づくり村が実現する見通しができたわけである。関係自治体及び業界49団体で財団法人を設立し、昭和60年3月に着工し、同年11月工事完了となった。

4. 工房の取り組み

一方工房は「盛岡手づくり村設立推進準備会」を結成して、調査と計画づくりをしていたが、昭和59年6月に衣替えをして、仮称「盛岡手づくり村協同組合設立準備会」とした。準備会は、14社による工場共同利用事業実施計画に関して、中小企業事業団・県などによる計画建設診断を受けた。同様の診断を、先の地場産業振興センターについても実施している。(59年9月)

工房建設等については実施機関は盛岡市である。昭和60年5月1日財団法人盛岡地域地場産業振興センター「盛岡手づくり村」が開業した。

手づくり村の構想策定から6年半、「X村構想」発表から11年を経ての結実となった。

設立までの年表

- 昭和49年 X村構想の策定
- 昭和54年10月 手づくり村構想の策定
- 昭和54年9月 盛岡手づくり村設立推進準備会の設立（参加社26社）
- 昭和57年3月 岩手県が内陸部地域地場産業振興ビジョン策定
盛岡手づくり村共同利用工場建設計画の作成（対象企業15社）
- 4月 共同利用工場建設計画指導（対象企業15社）
- 8月 盛岡市に盛岡手づくり村建設委員会が設置される
- 昭和58年3月 盛岡市、関係町村や商工会議所・商工会及び業界に対して働きかけ
- 7月 盛岡手づくり村設立推進準備総会
- 9月 盛岡地域地場産業振興センター設立推進委員会発起人会発足（3市町・3商工団体・5組合）
- 10月 盛岡地域地場産業振興センター建設推進委員会発足（12市町村・12商工団体・25組合）
- 11月 推進委員会「盛岡地域地場産業振興計画」策定
岩手県地場産業振興対策協議会、振興計画を了承
- 昭和59年1月 仙台通商産業局（当時）に対し、建設計画（素案）を説明
- 3月 推進委員会「盛岡地域地場産業振興センター建設計画」策定
盛岡市、高度化事業計画提出
盛岡手づくり村建設地を現在地に決定
- 4月 中小企業庁ヒアリング
- 5月 岩手県が高度化事業として採択
- 6月 （仮称）盛岡手づくり村協同組合設立準備会の設立（14社参加）
- 7月 財団法人盛岡地域地場産業振興センター設立発起人会開催
財団法人盛岡地域地場産業振興センター設立許可申請
- 8月 財団法人盛岡地域地場産業振興センター設立許可

- 9月 財団法人盛岡地域地場産業振興センター設立登記
昭和59年度振興センター第1回理事会開催
盛岡市議会、盛岡手づくり村造成工事請負契約締結を議決
- 10月 盛岡市、地権者と用地買収契約を締結
- 11月 盛岡手づくり村造成工事着手
- 12月 (仮称)盛岡手づくり村協同組合設立準備総会
岩手県から昭和60年度高度化対象事業選定通知
事業補助金交付決定、交付契約締結
設計完了

- 昭和60年 1月 盛岡市と工場共同利用事業基本契約を締結
- 2月 工場共同利用事業実施計画書を岩手県へ提出
- 3月 工事契約締結
盛岡市議会で盛岡市の債務負担行為を議決
盛岡地域地場産業振興センター工事着手
市長と知事とで高度化資金にかかる盛岡市の損失補償契約締結
資金入金、貸付契約締結

- 昭和61年 2月 共同利用工場完成
- 3月 盛岡市と土地売買契約締結
展示資料室、展示即売室内装工事竣工
- 4月 展示資料室の展示品陳列
- 5月 開業する

第3章 開業20年の主な歩み

第3章 開業20年の主な歩み

1. 昭和61年度～平成2年度

成功事例として全国から称賛！

昭和61年5月1日、盛岡地域における地場産業振興を図る拠点として、全国的な関心と注目の中で「盛岡手づくり村」はオープンした。

初年度の昭和61年度は、特に振興センター運営基盤の確立を中心に、国、県及び市町村、さらに関係する諸団体と緊密な連携を保ちながら、地場製品の展示即売、宣伝普及、新商品開発、情報収集提供、地域交流促進などの事業を積極的に実施し、地場産業の振興と地域経済の活性化促進につとめた。ちなみに、骨格をなすこれらの事業は初年度以降も同様に実施している。

オープン以来、県内はもとより、国内、あるいは海外からも反響が相次いだ。初年度だけで海外視察団、国、県市町村、各種団体等視察来訪者は延べ410団体、5000人に達している。当初は物珍しさも手伝っていたようだが、視察来訪者は年を追って増加し、3年目を迎えるころには、地場産業振興施設の成功事例として注目を浴び、やがて全国各地に同様な施設を設置するところも出てきた。

観光客などからの評価も高いものがあった。話題が話題を呼び、尻上がりに入場者が増加していった。リピーターの多いのも特徴であった。

開業後わずか1カ月後の昭和61年6月8日、入場者が10万人を突破した。7月12日には20万人を超えた。6月から7月の平日でも入場者数が落ちることはなかった。62年6月20日、入場者が100万人の万台に乗った。開業以来13カ月、予想を上回る快挙だった。

平成3年2月23日、入場者は500万人に達し、5年目という節目の年度に花を添えた。

2. 平成3年度～7年度

充実構想盛り上がる！

平成3年度、開業以来満5年を迎えた盛岡地域地場産業振興センターは、5月3日から5日まで「ポラーノフェスティバル」、さらに夏休みの8月3日から5日まで「ポラーノ広場夏まつり」を盛岡手づくり村開業5周年記念事業として実施した。さらに記念花時計（柵山龍司氏デザイン）を同年10月22日に設置した。記念式典、祝賀会は5月1日に開催された。

盛岡手づくり村は、南部曲り家（盛岡市所有）、財団法人盛岡地域地場産業振興センター、協同組合盛岡手づくり村の複合組織及び施設が一体となっているが、その中の中核施設である財団法人盛岡地域地場産業振興センターがそれぞれから委託を受け、総合的な維持管理を行っている。

地場産業は小規模零細な企業が大部分を占め、財政、経営力に乏しく公共団体の積極的な指導をもって振興事業を実施する必要がある。また、振興センターは地域経済に大きなウエイトを占

める地場産業の振興・育成とともに地場産業と地域住民の相互交流、地場産業がもたらす文化性の向上、さらには広域観光開発等を含めた総合的機能をもつものであり、民間の収益性と公益的性格を併せ持つ複合施設である。

このようなことから振興センターの運営にあたっては、行政の財政力・計画性・公共性と民間の有する柔軟な頭脳と活力の融合が必要であり、地域に密着した施設として十分な機能が発揮できるように官民一体となった第3セクターとしての運営が効を奏したといえる。

一方協同組合盛岡手づくり村は、広域な盛岡地域の地場産業に携わっている業者が老朽施設や、生活環境の改善を迫られ、さらに体質の強化や後継者の確保に努めるべく団結して、共同利用工場を建設するため、組合を設立したものである。来村客には製作工程の見学や手づくり教室を体験してもらい、さらに地場産品に対する理解を深めてもらうことが狙いである。また公的機関の指導を受けて技術の多様化を進め、14工房の異業種集団の利点を最大限に発揮し、消費者と直接の交流の中から多面的商品の開発を行い、また常に、魅力ある施設となるような施策を組合全員で取り組んできた。こうした姿勢が功を奏し、当初の計画をはるかに上回る入場者数を記録し、順調に推移してきたことから、地域産業の振興にさらに寄与しようと、盛岡市、関係団体が拡充計画について調査研究を始めた。

平成6年度になって業種の絞り込みや、拡充内容についての検討に入り、いよいよ本格的な構想を打ち出す段階になった。

また、開業当初の昭和61年度以来、施設内で手づくり教室を開いてきた。「触れて、さわって、参加して」の開設趣旨に添った事業の一つだが、入場者に圧倒的な支持を受けてきた。初年度は陶器、染め物、竹細工、わら細工、郷土玩具の手づくり教室を実施、以来ホームスパン、陶器の絵付け、こけしの絵付けも加え定着した。

季節イベントとしては、例えば平成6年度を例にとると、盛岡手づくり村なつかし広場（5月）、チャグチャグ道場（6月）、ふるさと青空市場（8月）、小正月行事（1月）、盛岡手づくり村冬まつり（2月）、節句行事（3月）とあるが、年度によってイメージを変え、リピーターを考慮した内容を盛り込んだ。

平成4年度にはTAP北東北キャンペーンやアルペンスキー世界選手権盛岡・雫石大会があり、平成5年度には国民文化祭の「ウッデイライフ展」が手づくり村を会場に開かれた。

平成6年度には、国際家族年記念全国ファミリンピック岩手県大会や、ボランティアフェスティバルなども開催され、そうしたイベントの参加者が必ず訪れる施設に成長した。

3. 平成8年度～12年度

バブル景気の崩壊後、全国的な景気低迷時代が訪れ、全国の観光施設も大きな打撃をうけた。盛岡手づくり村も来場者は年々落ち込み、地場産業振興センター、協同組合盛岡手づくり村も大

変厳しい状況にいたった。平成8年度は盛岡手づくり村が昭和61年の開業以来10周年を迎え、地場産業振興センター、協同組合盛岡手づくり村、盛岡市、構成市町村等と共に記念事業実行委員会を組織し、愛される手づくり村を目指すための「来場者アンケート」の実施、首都圏や近県に10周年を宣伝する「PRキャラバン」、その他、「記念式典・祝賀会」（5月）、全国の地場産センターを招へいしての「全国物産展」（8月）などを開催した。平成8年7月30日に入場者は1,000万人に達し、10年目という節目の年度に花を添えた。

平成9年度からは盛岡市主催の「盛岡市伝統的工芸品図画・作文コンクール実行委員会」の事務局を引き継ぎ、多くの児童、生徒に呼びかけ地場工芸品の普及と、後継者育成に努めた。

平成10年度には景気低迷に加え、岩手山の火山爆発風評や大地震の発生など自然災害にも見舞われ、観光客の入り込みの減少はさらに増加した。地場産業振興センターでは運営強化対策として盛岡市の援助を受け、インターネット販売「楽天市場」バーチャル産業まつりを本格的に実施し始めた。また、地域全体で観光客を誘致するため盛岡手づくり村、小岩井農場、つなぎ温泉が連携して協議会を組織し、相互の施設見学会を行ったほか、今後の事業展開の検討を行った。

平成11年度も長引く景気低迷の回復は見られず、盛岡手づくり村では運営を強化するため、1月2日から正月営業を始めた。また、10年度より地域連携事業として小岩井農場とつなぎ温泉とで組織してきた協議会も「ワイワイ手つなぎプロジェクト」と名称が決定し、周辺マップやホームページを制作するなど観光客誘致に力を注いだ。

平成12年度は業種の絞り込みや、拡充内容についての検討が入り、いよいよ本格的な構想を打ち出す段階になりつつあった拡充計画も、長引く景気低迷の影響を受けた盛岡市の財政難によって、振り出しに戻り、盛岡手づくり村の知名度アップの糸は絶たれた状況にいたった。

4. 平成13年度～17年度

入場者の落ち込みには歯止めがかかってきてはいるが、景気低迷はやはり企業、個人に影響を与え、購買単価は低迷状態をたどっている。しかし、この年度から外国人観光客が岩手県へ多く入り込み盛岡手づくり村にも毎日多く訪れるようになり、それに対応するべく4カ国語の歓迎ステッカーを制作したり、誘致キャンペーンに参加したりと国際化の対応を行った。また、盛岡手づくり村の中核施設である財団法人盛岡地域地場産業振興センターの事務局長にも民間人を迎え、より一層の運営強化を行った。特に周辺の施設との連携による誘致活動に力を注ぎ、相互に1つのエリアとして観光客へのPRを実施した。

平成13年度は地元施設との連携事業としてつなぎ温泉観光協会との「つみ草料理サミット」や御所ダム事務所との「パネル展示展」、小岩井農場、つなぎ温泉との「連携イベント」を開催したほか、特に冬場の観光客誘致のため、「いわて清酒とワインフェア」を開催した。

平成14年度は業界支援にも力を入れ、インターネットを活用した情報の受発信や若者のネット

ワーク作り、地場産業を紹介するCD-ROMを県内の学校に配布したことも特筆される。また、運営強化の一助として大手観光エージェントへのショッピング手数料制度やポイント制度などを導入し、運営基盤の強化を図った。

平成15年度は修学旅行誘致の活動に特に力を入れ北海道の開拓を行ったほか、台湾のチャーター便に加え香港の顧客開拓も展開した。12月には2年前に火事で焼失した南部曲り家も新たに完成し、記念イベントを開催して県内外のお客様にPRを行った。

また、業界の支援にも一層力を入れ、地場産業に携わる若者を対象に商品開発を学ぶことを目的に「ジバデザインプレナー塾」を開催したほか、市場のニーズや先進のデザインを目や肌で感じることを目的とした「研修視察」も実施した。特にものづくりという職業やものづくりする人を紹介する「盛岡地域産学交流フォーラム」は多くのお客様で賑わいをみせた。

平成16年度は静岡で開催された「浜名湖花博」による関東地方の団体客の減少が著しく、盛岡手づくり村も大きな打撃を受けた。そうした状況に対処するため、盛岡手づくり村の新しいホームページを作成したり、盛岡手づくり村全体の運営について協議検討する「機能強化委員会」を設置した。さらに、展示資料室の一部を改装してお客様の入場意識を高めたり、レストランのメニューを新しくして変化のある盛岡手づくり村をPRした。また、センター職員や工房職人が一体となり盛岡手づくり村の名所をつくるため花壇づくりを行った。併せて、つなぎ温泉活性化委員会と連携し「周辺の散策マップ」を作成し、市民を対象にした散策ツアーを実施した。

平成17年度は名古屋で万国博覧会が開催され、昨年に引き続き関東周辺の観光客の減少がみられたほか、修学旅行も班行動制が主流となり、さらに来場者数の増加が厳しくなった。20年目という節目を迎えた盛岡手づくり村は、待望久しかった新工房の冷麺工房が4月に完成し、新たな展開を県内外にアピールすることができた。また、冷麺体験が人気を呼び、多くの体験希望者が訪れたほか、新工房誕生によりマスコミからも注目され、テレビ番組が全国へ多く放送されインターネット販売額が急増するなど活気が戻ってきた年となった。

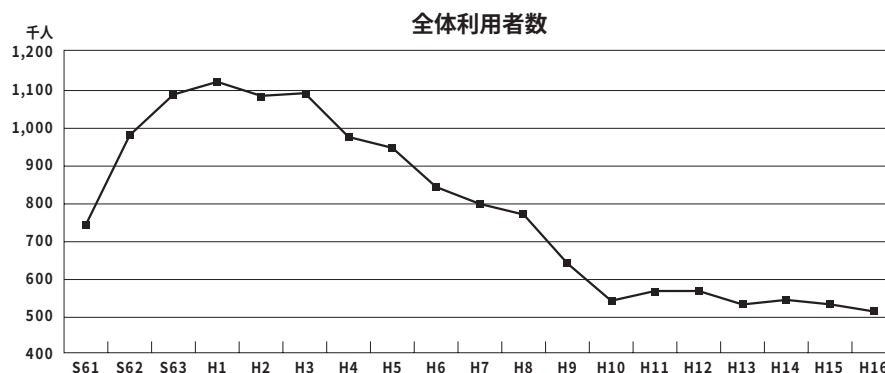
5月20日には開業以来1,500万人目のお客様をお迎えし、20年目の節目に花を添えることができた。

第4章 盛岡手づくり村の現状と課題

第4章 盛岡手づくり村の現状と課題

1. 盛岡手づくり村への入場者数

- ① 昭和61年5月1日オープンの初年度（昭和61年度）の入場者数は、74万7千人と当初計画（18万人）を大幅に上回り、平成元年度の112万人をピークとし、平成8年度まで開業年度を上回る実績をあげた。
- ② 好調の要因としては、盛岡手づくり村が、盛岡広域圏の地場産業業界、行政、関係団体が総力をあげた地場産業振興の拠点施設として整備され、県内外の注目を集めたこと、小岩井農場やつなぎ温泉等の観光地に近接し、風光明媚な御所湖畔に立地できたこと、開業以来、財団法人盛岡地域地場産業振興センターを中心に、旅行代理店との連携、マスメディア利用による宣伝など広く県内外に誘客に努めたことなどがあげられる。
- ③ しかし、平成9年度から10年度にかけて、全国的な景気低迷に加え、岩手山の火山噴火風評等から観光客の入込みが減少し、入場者数が大幅に落ち込んだ。また、団体旅行離れやスキー客離れ現象により、観光客入込みが減少していることも拍車をかけた。盛岡手づくり村自体も、拡張計画の検討を行ったものの実らず、大きく変わらなかったことも減少の要因にあげられる。
- ④ 平成11年度以降はやや落ち着きをみせ50万人台を維持している。平成17年5月20日には1,500万人の入場者を記録した。県内客概ね35%、県外客65%となっている。



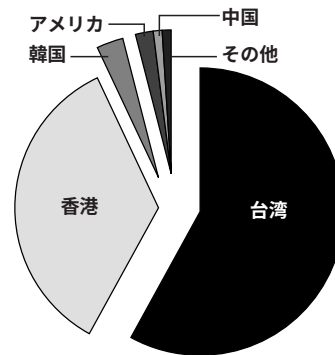
⑤ 外国人観光客

盛岡手づくり村に来る外国人観光客は増加しており、平成16年度13,850人（盛岡手づくり村の独自調査で対前年度比277.4%）となっている。県内合計に占める割合は推定17.5%となる。この外国人観光客数は、バスで来村する外国人の出身国と人員を独自に集計確認したものである。

平成16年に小岩井農場がある雫石町への外国人入込客数は25,260人（岩手県観光統計概要）であり手づくり村にはその55%が来たことになる。

盛岡手づくり村も平成15年には、香港を対象に誘客活動を実施した。また、外国人観光客向けに、4カ国語の案内板を設置し積極的に対応してきた。

平成16年、台湾からのチャーター便が就航することになり、国別では台湾がトップ、次いで香港となっている。

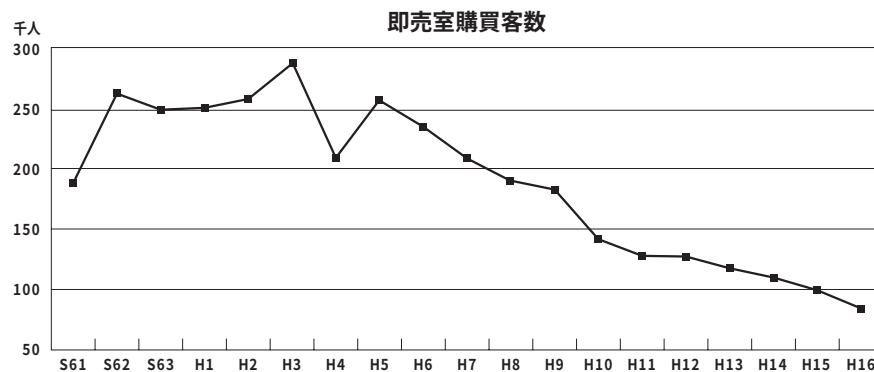


外国人観光客については、今後も増加することが期待されるため、手づくり村にとっても国際化への対応と同時に、展示資料室の見学、手づくり体験など外国人客をひきつけ魅力を高める対策の検討を要する。

2. 盛岡地域地場産業振興センター施設の利用状況

(1) 展示即売室

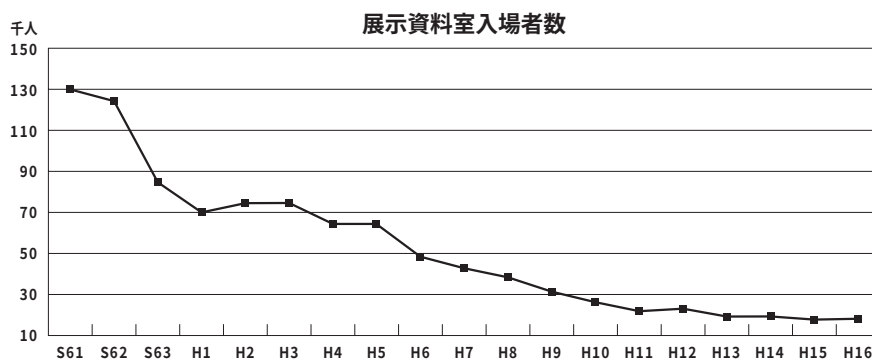
- ① 平成16年度の即売室購買客数は、約83千人（前年度比83.9%）、売上金額193百万円（同85.8%）で、年々落ち込み減少に歯止めがかかっていない。



- ② 商品は、南部鉄器、木工品、民芸品、織・染物、菓子・食品など3,500種類。
- ③ 魅力ある売場づくりのため、出展者への売上情報の提供（POSシステム）、陳列台の改装、小間内の商品構成の見直しなどを行っているほか、中元・お歳暮時期にギフトコーナーを設置しセールスによる販売促進、修学旅行向け「お土産特撰カタログ」を作成し普及宣伝に努めている。
- ④ 販売員の接客接遇研修にも力を入れ、買い手の立場に立った親切的な売場づくりに努めている。

(2) 展示資料室

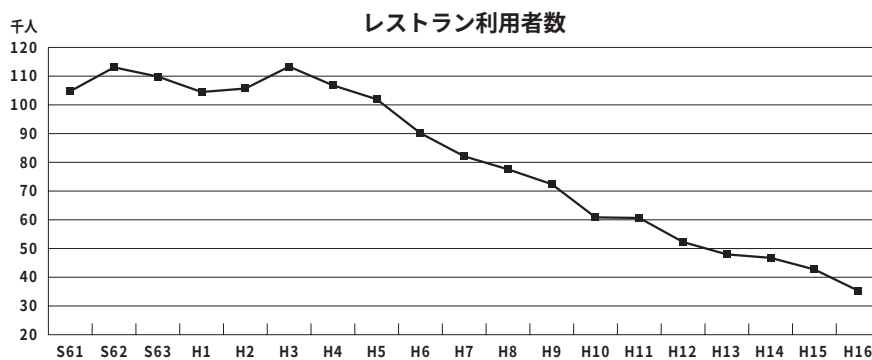
- ① 平成16年度の展示資料室の入場者数は、約14,800人（前年度比104.1%）、入場料収入128万円（同100.9%）と減少に歯止めがかかったものの、開業時に比べると激減した。



- ② 市町村コーナーの改装や展示品の充実、映像資料の放映など、入場者の増加に努めているが、100円の料金を徴する割には、2階に案内人が配置されていないなど、誘客への働きかけが弱い。

(3) レストラン

- ① 平成16年度のレストラン（喫茶コーナー含む）の利用者数は、約35千人（前年度比82.0%）、売上金額は31百万円（同83.0%）と大幅に落ち込み、減少に歯止めがかかっていない。

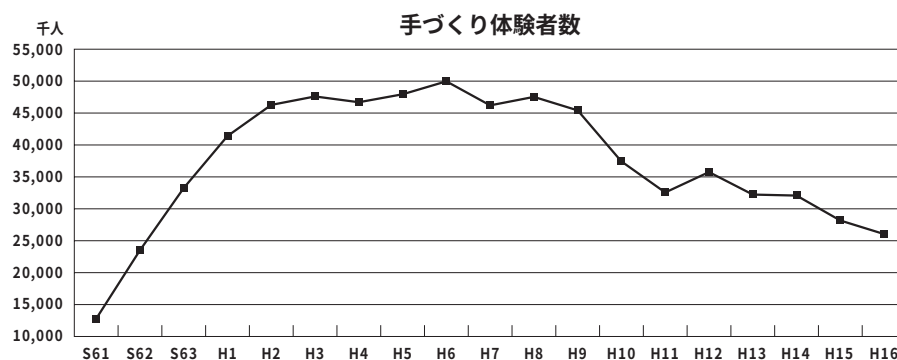


- ② メニューの見直し、新メニューの開発、団体客の食事への対応等の努力をしているが、来場者数の減少に加え、手づくり村が午後5時に営業を終了する制約もあって、周辺観光地やロードサイドの飲食ゾーンとの競争に対応しかねている現状にある。

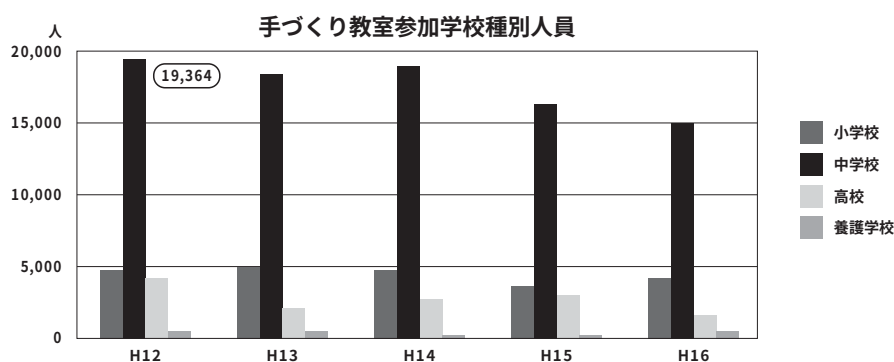
(4) 手づくり体験教室

- ① 平成16年度の手づくり体験教室の利用者数は、約25千人（前年度比90.0%）、収入金額は31百万円（同90.2%）と、ピーク時に比べ概ね半減している。

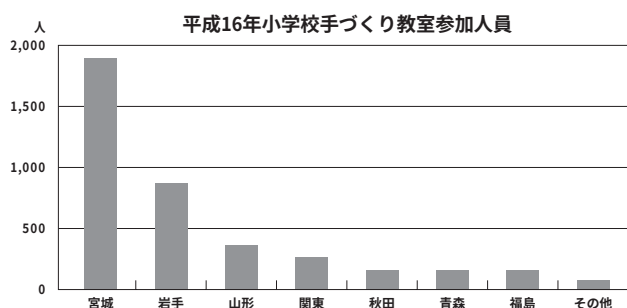
- ② 手づくり体験教室は、「陶器」「染物」「竹細工」「わら細工」「木工玩具」「ホームスパン」「こけし絵付」「陶器絵付」の8コースを通年で実施してきた。現在は、平成17年度に入居したぴょんぴょん舎の「冷麺」が新たに加わった。
- ③ 参加人数は減少しているとはいえ、親子での手づくり体験や修学旅行の手づくり体験学習は人気を博している。

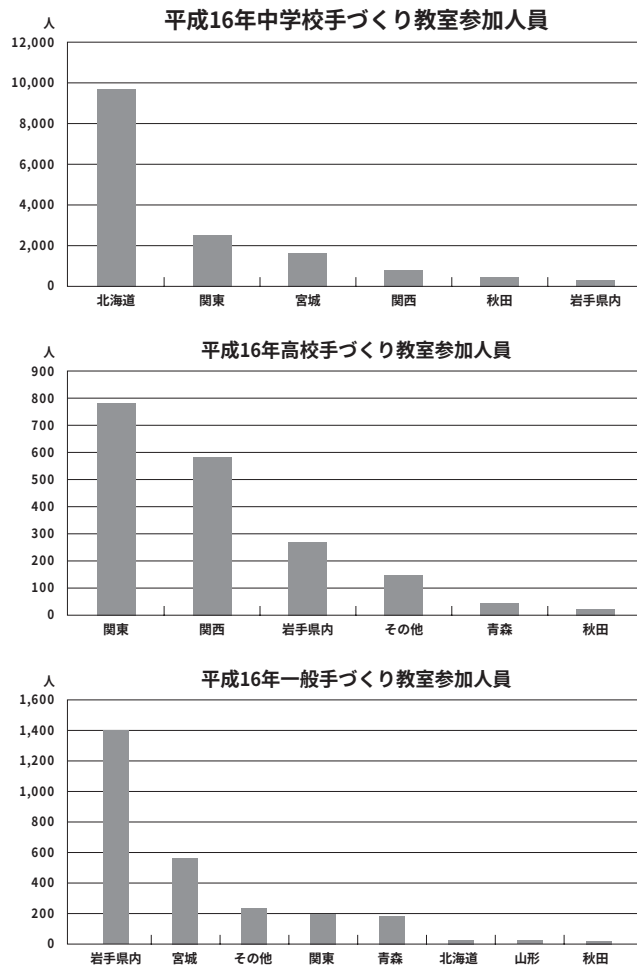


- ④ 学校種別では中学生が多い。平成15年から北海道では、修学旅行距離の制約が変わり、盛岡以南も旅行範囲に入ることになった。また、グループ（班）活動が重視されることになり、旅行中の活動についてグループの自主的な判断により決まる。



- ⑤ 平成16年の、発地別体験者数では、小学校は宮城県、中学校は北海道、高校では関東が多く一般客は県内が多い。





3. (財)盛岡地域地場産業振興センターの活動状況

(1) 組織運営

- ① 財団法人は、理事会（理事長：盛岡市長、専務理事：盛岡市産業部長など20名で構成）、評議員会（会長：紫波町商工会長など22名で構成）が各2回開催、運営されている。

事務局は、事務局長のもとに総務部（2名）、振興部（2名）、地場産品普及部（2名）の3部6名で、このほか即売室等補助職員7名で構成されている。

- ② 平成15年度から振興センター機能強化委員会を設置して、センター事業や施設の見直しを図り、今後のあるべき姿を検討している。

(2) 施設の維持管理

センター施設の管理のほか、盛岡市から南部曲り家、駐車場、公園緑地等の維持管理を受託している。

(3) 地場産業振興事業

盛岡地域地場産業振興センターの機能や経験及び関係機関とのネットワークを活かし、地場産品情報の受発信、需要開拓、人材育成等を積極的に行い、広く地場産業の振興に努めて

きた。また地場産品の宣伝普及を図るイベントの開催、業界との共同催事、全国地場産フェアをはじめとした物産展への出展販売、来場者を対象とした手づくり教室の開催による体験学習等の事業を推進してきた。

主な事業の実施状況は次のとおりである。

① 情報対策事業

開業以来、情報機能強化委員会や地場産業モニター会議を主催し、業種毎のマーケティングリサーチを実施、消費者ニーズに対応した新商品の開発を進めてきた。また、平成10年度以降は、情報受発信基地化事業として、IT化の進展に対応し情報機能の充実強化に努めた。

- ・振興センターホームページの運営

(<http://www.isop.ne.jp/home/zibasan/center.htm>)

- ・インターネット「【楽天市場】盛岡市産業まつり」の運営

(出品物：食品、民芸品等 450アイテム)

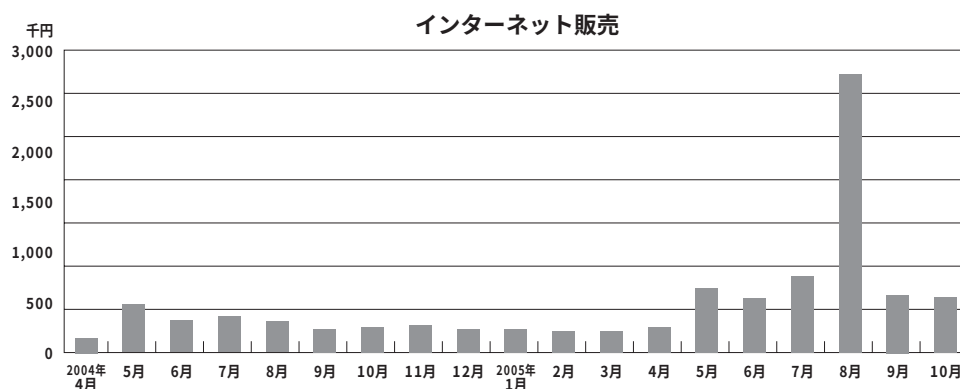
- ・カタログ、インターネット通販
- ・インターネット活用による情報収集提供
- ・「盛岡地域産業観光施設ネットワーク」のパンフレット作成、サイトの公開 など。

② インターネット販売への対応

平成10年、センターの運営強化のため盛岡市当局の後押しもあってインターネット販売「【楽天市場】盛岡市産業まつり」を本格的に開始した。盛岡市の名称が入っているところから信用を得ている。取り扱いとは年々増加しており、今後の成長が見込める事業である。

協同組合盛岡手づくり村でも、「盛岡手づくり村WEB SHOP」を開いている。また、単独でWEBサイトを開設している工房もある。

今年度に入り、テレビの料理番組「どっちの料理ショー」で冷麺や南部鉄器が取り上げられ、番組が全国放映されたことにより、アクセスが急増し、手づくり村では、「南部鉄器」などで注文に間に合わない状況が続いている。



③ 交流促進事業

盛岡手づくり村への誘客と地場産品の普及のため、恒例の季節イベントを開催したほか、関連業界、団体等の催事利用を支援した。

- ・盛岡手づくり村春まつり（５月）
- ・盛岡手づくり村チャグチャグ馬コ記念催事（６月）
- ・盛岡手づくり村夏まつり（８月）
- ・盛岡手づくり村工房まつり（９月）
- ・盛岡手づくり村秋まつり（10月）
（岩手のうどんまつり、南部鉄器まつりを併催）
- ・お正月営業催事（１月）
- ・盛岡手づくり村小正月行事（１月）
- ・いわての清酒とワインフェア（２月）
- ・盛岡手づくり村節句行事（３月）
- ・お菓子づくり教室（随時）

④ 新商品開発能力事業

昭和61年度から平成９年度まで各業種のテーマを設定し、新製品の開発、試作、パッケージデザインの開発を行い、平成11年度以降は、人材育成事業により、消費者ニーズの多様化に対応できる商品開発能力の向上を図った。

⑤ 人材育成事業

時代に適合する経営能力、技術能力を備えた人材を養成するため、各種セミナーを開催したほか、各機関の実施する講演会や研修会に積極的に派遣参加するなど、特に後継者の育成に尽力している。また、センター職員等の研修により、実務能力の向上を図った。

- ・平成７年度には、「盛岡市伝統的工芸品図画・作文コンクール」事務局の運営を、盛岡市から受託した。
- ・平成12年度には、異業種交流グループ「盛岡地域ブランド研究会」を発足させた。
- ・平成14年度からは、将来の地場産業を担うべき学生や若者を対象に、地場産業に対する知識と職業としての意識高揚を図るため、「地域人材確保・養成事業」に取り組んだ。「ジバ・デザインプレナー塾」を開講し、商品企画・デザイン力の養成に努めた。

⑥ 需要開拓事業

盛岡地域の地場産品や盛岡手づくり村を広く県内外に宣伝紹介し、販路拡大、需要開拓、センター展示即売室の売上増大を図るため、県内外の物産展に積極的に参加した。

一方、季節ギフトのカタログ、修学旅行向け「特撰土産カタログ」を作成し、宣伝販売を行った。また、インターネット「【楽天市場】盛岡市産業まつり」の運営やカタログ、イ

ンターネット通販なども販路拡大につながった。

(4) 委員会等の活動状況

① 機能強化委員会

平成15年11月5日に盛岡地域地場産業振興センター機能強化委員会が設置されている。事務局は盛岡地域地場産業振興センター（以下、「センター」という。）におかれている。

平成18年には20周年を迎えるにあたり、地場産業の振興と雇用の確保・創出を促進し、センターの事業や施設を見直し、今後のセンターの事業や施設改善整備のあり方などセンター全体の機能の見直しを図るべく設置されたものである。

この目的を達成するために、具体的な事業として次の5項目を掲げている。

- i 地場産業の振興の育成に関する調査、検討に関すること。
- ii 即売室の改装とレイアウトに関すること。
- iii 展示資料室の活用に関すること。
- iv レストランの運営に関すること。
- v 盛岡手づくり村の環境整備に関すること。

委員会は、行政機関・商工指導団体・地場産業関係団体の役職員に学識経験者を加え、会長は「センター」専務理事の盛岡市産業部長、副会長は、協同組合盛岡手づくり村理事長である。

主な活動は以下のとおりである。

平成16年の委員会では、小委員会の設置と「ニーズ調査」「即売室の改装とレイアウト」「展示資料室の活用」「レストランの運営」「手づくり村の環境整備」について検討した。

小委員会の構成は、センターの事務局長、協同組合盛岡手づくり村、地場産センター出展者会、盛岡市、酒造組合、市民団体などである。

「即売室の改修とレイアウト」に関しては、出展者から改装計画とレイアウトの提出をしてもらい、このための予算措置を盛岡市に要請したが、結果として平成16年度の予算措置がかなわず実施期日を繰り延べすることとした。

「展示資料室の活用」については、委員会では、展示資料室の強化を図るべく市町村の担当学会議を開催し、評価の低かった市町村コーナーを全面改装してほとんどの陳列品を入れ替えた。

また、手づくり村の作品を展示するスペースを設けたほか、「菓子」と「麺」のコーナーの説明を強化するなどの整備を行った。

「レストランの運営」についても見直しを行い、メニューなどを入れ替えたほか、制服を制定するなど平成16年6月から実施している。

「環境整備」については、水仙500本、チューリップ1750本、つつじ160本、あじさい330本などを植え植栽事業を現在も継続実施している。

② つなぎ温泉活性化委員会

つなぎ温泉活性化委員会は「つなぎ温泉」と「盛岡手づくり村」が相互に観光客の誘致活動を推進するため、共同で地域の観光開発・観光ルートの整備をしている。

活性化委員会をつなぎ温泉観光協会、つなぎ温泉のホテル・旅館経営者、盛岡市民代表、つなぎ町内会、センター、盛岡市がメンバーで、会長はホテル大観代表取締役の佐藤義正氏である。

委員会の下に「ワーキンググループ」を置き委員長はホテル大観の佐藤克氏である。

このワーキンググループで実際に歩いて御所湖周辺の散策ルートを設定した。「森林コース」「街コース」「湖畔コース」である。このコースのPRのため「つなぎ温泉おでんせマップ」を作成した。

また、JTB旅連「地域活性化支援事業」の補助金を活用し、各コースに歩きやすいように標識をたて、急な登りには階段ロープをつけた。

繋地区道路標識は県の活性化調整費で設置したが、これもつなぎ温泉活性化委員会の活動が実を結んだものである。

③ ワイワイ手つなぎプロジェクト

このプロジェクトは、「盛岡市の西部地域に位置する施設が手をつなぎ、周辺の自然環境について保護・活用を協議し、相互施設の特色を有機的に結びつけ観光ゾーンを整備して、これからの観光ニーズに合ったプランを開発し、情報発信と盛岡市西部地区への観光客誘致の強化を図ること。」を目的に、小岩井農場、盛岡手づくり村、つなぎ温泉観光協会の3者のメンバーで設立されたものである。

会長はつなぎ温泉観光協会会長の佐藤義正氏である。

盛岡手づくり村・小岩井農場まきば園・つなぎ温泉を紹介する「ワイワイ手つなぎマップ」をつくり共同で観光客誘致に活用している。

平成16年の主な事業は、御所湖湖畔の植栽事業、相互の催事への支援、JTB旅連事業・盛岡地方振興局土木部受託事業などである。さくらの新名所を作るべく、御所湖の周辺で植栽活動を実施、「尾入野植物園」にある盛岡市の花「かきつばた」の株分けを実施した。

また、繋小中学校の児童生徒全員参加のもとに、湖畔を花で飾る活動を実施、つなぎ大橋たもとの広場の名称を「手つなぎ広場」に変えた。

4. (財)盛岡地域地場産業振興センターの収支状況（一般会計と特別会計の合計）

（単位：千円）

収入の部	平成14年度	平成15年度	平成16年度	H16／H15
補助金収入	34,469	34,000	39,000	114.7%
事業収入	91,888	82,417	71,073	86.2
負担金収入	10,001	9,769	9,819	100.5
委託料収入	8,603	8,587	7,970	92.8
その他収入	8,446	2,409	3,113	129.2
当期収入計（A）	153,407	137,182	100,975	95.5
前期繰越	4,053	4,678	3,515	75.1
収入合計（B）	157,460	141,860	134,490	94.8
支出の部				
管理費	106,639	100,999	98,906	97.9
事業費	24,052	22,475	17,195	76.5
施設維持費	13,545	13,310	12,479	93.8
その他支出	8,546	1,561	2,745	175.8
当期支出計（C）	152,782	138,345	131,325	94.9
当期支出差額A－C	625	△ 1,164	△ 350	30.1
次期繰越 B－C	4,678	3,515	3,165	90.0

- ① 平成16年度の事業収入は、即売室等の手数料収入69,793千円と展示資料室入場料収入1,280千円の計71,073千円で、前年度比13.8%の減少である。事業収入は平成3年度をピークに年々減少してきており、10年前（平成6年度）に比べると、約59%減（金額で約1億円の減）となっている。
- ② 事業収入の減少に対応し収入合計も減少してきたため、管理費（人件費、事務費等）、事業費、施設維持費等の支出を節減し続けてきた。10年前の支出計（平成6年度）に比べると、47%減（金額で1億16百万円の減）で、高度化資金の返済（年間51百万円、平成13年度で完済）が終了したことが大きい。
- ③ 高度化資金（667,400千円）の返済は、盛岡市補助金と事業収入を財源とし、昭和63年度から平成13年度の間で行われた。

第5章 今後の振興に関する提言

第5章 今後の振興に関する提言

手づくり村の来場者数は平成16年の実績で510千人である。減少したといっても、年間50万人もの観光客をひきつけているのは関係者の努力の賜物である。

工場共同利用事業（高度化事業）を実施した協同組合盛岡手づくり村は、この20年間一人の脱落者も出さなかったことは特筆に値する。

20年を節目とし、盛岡地場産業振興センター（盛岡手づくり村）が地場産業振興の一大拠点となり、岩手県を代表する観光施設へと発展して欲しいものである。

1. センター機能強化のために

(1) 地場産業振興のための本来の業務の見直し

地場産業振興センターには、盛岡地域の地場産業の総合的な振興策を計画し推進するという本来の役割がある。また、工房では産業として最終消費者を意識し、消費者の「本物志向」「手づくり品」に対するニーズにも応えていかなければならない。

工房・研修施設・市民の体験施設を配置した「地場産業振興センター」「手づくり工房」を建設し、それぞれの相乗効果を期待するものであった。

地場産業振興のための企画・調整機能はどのように機能してきたであろうか。

「機能強化委員会」の検討テーマでもあるが、この中で再度「何をなすべきか」を検討いただきたい。財団法人の組織上の制約（補助金により運営）により、単なる実施部隊に終わってきたのではないだろうか。

収益事業を分離し、財団は管理組織とし、運営は業界団体の出資する株式会社に行えないか。非収益部門については財政的な安定が必要である。

(2) 委員会活動の活性化

現に、盛岡地域地場産業振興センター機能強化委員会が組織され、具体的な項目について検討し実施に移されている。

所管する業務内容から、センター業務の全てを包含する委員会組織となっており、この下に小委員会（ワーキンググループ）が設置され具体的な活動を展開している。

現在の委員会に、それぞれ分掌する名称を付した小委員会を設置し、その中で課題対応を協議していくことを望みたい。

また、委員会活動の中に「広報活動」を加え、イベントを新聞・TVに取り上げてもらうようにしたい。

(3) 手づくり村（工房）の魅力を高める

① 第2次事業拡充計画の策定

手づくり村の魅力アップ、地場産業振興、商品開発などを具体化するためには工房組合員の増加を図る必要がある。拡充計画は平成10年に計画されたが予算上の都合などで実施にいたっていない。20周年を迎えるこの時点で再度拡充計画を練り直したい。幸いそのための用地は確保されており、㈱中原商店（冷麺工房）の進出形態の例もあり弾力的で多様な対応が可能となった。

既進出済みの工房にとっても新たな連携の可能性をもたらすものであり、積極的な受け入れ活動を期待したい。

② 工房の集客力を高める

ア 意識改革が大事

「観光客に来ていただく。お客様を迎える」という工房の意識改革が必要である。

来場者のアンケートを参考にする。たとえば、ほめられたこと、苦情・不満、提言などを工房に周知させる。

イ 魅力ある商品づくり

伝統工芸品分野も含め消費者ニーズをつかみデザイン開発・新商品開発など常に新しいものを提供していく。

若い人が欲しくなる地場産品・工芸品を目指す。

個々のお客様を大事にする。顧客データベースを作成しDMの発送などに活用する。

ウ 産学官連携への積極的な取り組み

デザイン開発など毎月研究会を開催し実施しているが、岩手大学、県工業技術センター、県デザインセンター等を活用し連携を図る。

エ 手づくり体験によるお客様との交流

手づくり体験を通じてお客様との直接対話、触れ合いの場を提供する。

2. 入場者数の増加と売上増進を図るために

(1) センター施設の改善

① センター周辺施設の整備

駐車場は、当初レイアウトのままで変更がないが、駐車場からセンターまでの距離が長い。観光バス等は施設まで乗り入れ可能な旨の案内板を設置する。混雑時の誘導、トイレの清掃など必要である。

② センター施設等の改善

ア 入口とロビー

ロビーが暗くて狭いので、もっと明るくする。入口の「行事案内」をもっとわかりやすくする。

イ 展示資料室

- i 手づくり村観光ボランティアを配置する。

特に、展示資料室に資料の説明をするボランティアを配置する。

- ii 料金の100円は現状維持でよいが、ロビーから2階に行って見たくなるような案内訴求力が弱い。誘導表示の工夫が必要である。

- iii 構成市町村の合併により、名称の変更にあわせて展示物の見直しをする。合併記念物産展の開催も考えてみてはどうか。

- iv 季節感を持たせる展示の工夫と、最低年に1回は新規企画を実施する。

- v 茶室の活用機会を増やす。

有料でよいから南部鉄器で湯を沸かし茶室でお茶を提供する。

- vi CG機能を使った3次元のパノラマを展示する。

ウ 展示即売室

- i リニューアルを実施する。

20年同じでは飽きられる。

- ii 新製品を特筆列記し、説明表示する。

- iii 店員の接客マナーの改善に努める。

平成7年に研修実施、平成8年にマニュアルを作成しているが、その後のフォローを毎年実施するとともに、マニュアルに従業員みんなで確認し合う。

展示即売室と食堂では、毎朝基本的な「あいさつ用語」を復誦する。

- iv 随時、専門家による店舗診断を実施する。

(2) 周辺の観光地との連携

消費者の嗜好の変化が著しく、周辺のホテル・旅館も商品開発、模様替えに取り組んでいる。従来の団体旅行は影を潜めた。これからは団体客は減少し、個人・家族が目的を持って体験旅行する旅が主流になる。

現に手づくり村として「つなぎ温泉活性化委員会」「ワイワイ手つなぎプロジェクト」への参加を通じてつなぎ温泉、御所湖広域公園、小岩井農場との連携を強化する活動をしてきた。

- ① 手づくり村のイベントを盛り込んだエージェントとの観光商品開発

- ② つなぎ温泉との連携強化

ホテル・旅館の送迎バスの活用

連泊者へのサービス

- ③ 小岩井農場との連携

それぞれの行事・イベントの相互PR

(3) 修学旅行者への対応

手づくり体験教室の参加者は年々減少傾向を示している。従来、北海道の中学生が主な参加者であったが、これが減少している。業界団体と一体となった誘致活動を実施してきたが今後とも継続して実施していく必要がある。

今後、目を向けて欲しいのは、宮城県など隣接県の小学生である。小学校の先生を対象に手づくり教室のPRをする。また、現地に招待して体験してもらう。あわせて、修学旅行生が手づくり村に来てから帰るまでの一切をまかせられるボランティア（教員退職者などを想定）を配置する。

(4) 外国人観光客への対応

地場産品も世界に向かって販路を広げる時代である。外国人観光客対応にももっと力を入れるべきである。

外国語のできるボランティアを配置し、展示即売室の商品説明、展示資料室の資料説明をしてもらう。

海外客を招く本格的な観光ルートとして考えた場合、彼等を惹きつける態勢が当村にはあるだろうか。何が一番喜ばれるか、他所に先駆けて整備し、PRしていきたい。手づくり教室での外国語による製作指導なども必要であろう。

一方、外国人はほとんど買ってくれないという声もあり、手づくり村にとって実質的なメリットが上がるような工夫が必要である。

(5) ウェブマーケティングの充実

センターが運営する「【楽天市場】盛岡市産業まつり」は軌道に乗ってきつつある。

組合事務局が設定しているサイトからアクセスできる工房もあるが、工房によってWeb活用度が異なる。まだ自社HPのない工房もある。

今後、インターネット販売は確実に増加する。消費者は自分が欲しいものをネットで徹底的に調べ、来て、手にとって見て購入する。

また、顧客と双方向の関係を利用した商品開発にも役立つので引き続き積極的な対応を期待したい。

第6章 盛岡手づくり村工房の紹介

1. 虎山工房（株式会社南部鉄器販売）
2. 有限会社染屋たきうら
3. 有限会社盛岡せんべい店
4. 北杜窯（ほくとがま）
5. 有限会社薫山工房（くんざん）
6. 金田一製菓
7. 有限会社藤枝工房
8. 田中絃（つる）工房
9. 有限会社菓子工房
10. しばた工芸
11. 合名会社照亦製作所
12. ぴょんぴょん舎冷麺工房（株式会社中原商店）
13. 有限会社中千家具製作所
14. みちのく工房
15. 雫石民芸社

1. 虎山工房（株式会社南部鉄器販売）

盛岡手づくり村には、南部鉄器の工房が5つある。村内の工房の数が全部で15であるから、ちょうど3分の1を占めていることになる。それだけ南部鉄器は、岩手県を代表する伝統工芸であることを意味している。

株式会社南部鉄器販売の代表取締役社長・前田知行氏は、平成16年から「協同組合盛岡手づくり村」の理事長を務めている。見るからに「職人ひと筋」に生きてきたという風貌をたたえている。「理事長職なんて自分には似合わない。ほんの『つなぎ』のつもりで引き受けただけ」と本人は謙遜するが、組合員たちからの信望は厚い。

出された名刺には、「南部鉄瓶・湯釜／虎山工房／前田知行」とあり、会社名は刷り込まれていない。「虎山工房」の由来を訊ねると、「会社になる以前から、工房の作品に「虎山」（こざん）という銘を使っており、『虎山工房』は、いわば屋号みたいなもので、会社名よりは通りがよい」という。

前田房男氏（社長の父）が盛岡市加賀野に虎山工房を創業したのは昭和29年のことである。そして現社長が経営を引き継いだのが平成3年だった。社長自身は若いころ、盛岡市内のある鉄器製造会社の社員として営業を担当していたというから、南部鉄器との関わりは深い。盛岡手づくり村に入ったきっかけは、入村を予定していた別の鉄器製造元に請われて、たまたまその後を継ぐことになったのだという。

あれから20年。今では従業員3人とともに、鉄器製造に打ち込む毎日である。作品はすべて昔ながらの工法（手づくり、うるし仕上げ）で、南部鉄器特有の黒色、こげ茶色の作品には独特の気品がたayo。職人一人ひとりが、デザインから仕上げまでを担当する。すべての工程をこなして「ひとり前の職人」といえる。職人の世界には、昔もいまも変わらない厳しさがあることがうかがえる。

最近の悩みは、ご多分に洩れず「売上げの低迷」である。平成9年にNHKの「ためしてガッテン」という番組で「鉄器の効用」が取り上げられたときは、一時的な「鉄器ブーム」があったという。テレビや新聞、雑誌などで話題作りをしてもらおうと、てきめんに売上げは伸びる。もちろん自分たちなりに「手づくり教室」（予約制、料金2,000円から）を開いたり、ホームページによる通販に力を入れるなどの工夫や努力も欠かせない。

ショールームには、伝統工芸品としての鉄瓶各種のほか、すき焼き鍋やたこやき器、風鈴、キャンドルスタンド、お香立て、文鎮などが並んでいる。鉄瓶ひとつを取り上げても、形・大きさ・紋様・仕上げなどがそれぞれ違う。まさに「手づくりの逸品」ばかりである。

工房は窓ガラス越しに中が丸見えである。私が取材にお邪魔したときは、2人の職人さんが、黙々と仕上げ作業に取り組んでいた。（宮 健）

工房の名称／ **虎山工房（㈱南部鉄器販売）**

業種／ **南部鉄器**



●代表者／前田 知行

●設 立／昭和29年

●従業員／4名※

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2565

●F A X／019-689-2565

●E-Mail／kozan@mva.biglobe.ne.jp

※従業員数には代表者も入る（以下同じ）。

【工房の紹介】

伝統的な鋳型を使う焼型工法の鉄瓶を中心に製作。

鉄瓶や湯釜の鋳型をつくる為に使用する木型を改良して、従来は丸型が中心だった鉄瓶から、四角形や六角形などの多角形の鉄瓶などを量産するあらたな工法を独自に開発。

2001年春より販売を開始。

【代表者の抱負】

いま私は、手づくり村の役割についていろいろ考えている。すぐ近くにはつなぎ温泉、御所湖広域公園、小岩井農場などがある。これらの観光地とできるだけタイアップして、観光客を誘致することが手づくり村の活性化にもつながる。とにかくお客様に足を運んでもらわなければ、手づくり村の存在価値が薄れてしまう。

また、全体のことを考えると同時に、自分たち個々の工房の足元を固めることも大切である。そのためには、接客サービスにも力を入れなければならない。うちの工房では、夏場は通路側のガラス窓を外して、お客様と職人が直接対話できるように工夫している。納期が迫っているときなどは、正直いって「仕事に専念したい」と思うこともあるが、せつかく足を運んでくださるお客様との触れ合いを大事にしなければと思う。理事長としての立場もあり、自らを奮い立たせてがんばっている毎日である。

【作品・工房の作業風景】



南部鉄瓶、茶の湯釜、花器等



2. 有限会社染屋たきうら

藍染め工房を経営する「染屋たきうら」の発祥地は、石鳥谷町である。現在も石鳥谷商店街のなかで、「萬染物 和藍店」の看板をかかげて京染め呉服、洗い張りなどの店を経営している。社長・滝浦輝夫氏は、和藍店の運営を奥さんにまかせて、ご自身は毎日石鳥谷町から盛岡手づくり村に通っている。

社長の祖父・滝浦藤三郎氏が石鳥谷町に「藍染め、萬染物業」の店を開いたのは、明治42年(1909)のことである。その後、京染めの取次ぎも始めて店は繁昌するが、太平洋戦争のため一時商売を中断し、戦後、復員してきた現社長の父親・成三氏が家業を引き継いだ。成三氏は本業の藍染め加工に加えて、手拭い・印半纏などの染物加工や京呉服の販売などにも手を広げ、現在の事業の基礎を築いた。現社長が家業を継いだのは昭和50年。翌年には八戸市に支店を開設している。

滝浦社長が盛岡手づくり村入居のお誘いを受けたのは、構想が動き出してからだいぶ後のことだった。地域外であることが障害となり、いわば「第二次募集だった」と社長は言う。まだ元気だった父親は乗り気だったが、社長本人は通勤距離のこともあり、入居後の経営の展開にも自信が持てず、最初は「慎重にならざるを得なかった」と述懐する。

盛岡手づくり村の藍染め工房には、社長のほかに従業員が3人いる。製品は手づくり村内で販売されるほか、盛岡市内のデパート・ホテル・県産品の売店などにも置いているが、最近は観光みやげ品の売上げが全般的に「ぱっとしない」状況が続いている。手づくり村の来場者自体が落ち込んでいることもあり、その影響を受けているのは当然といえる。

こうした現状から少しでも脱却するためには、「それぞれの工房がお客様を呼び込む工夫をしなければならない」と社長は言う。「自分でできることからやってみることが必要だ」とも言う。平成4年に増築したのを機に、手づくり体験スペースを確保し、お客様に楽しんでいただけるように工夫をしている。最近は、藍染めの糸や布がパッチワークなどの素材としてよく売れるようになった。さらに今年は、5坪の展示スペースを「ゴツボギャラリー」と命名して、刺子展・刺繍展・水彩画展・木彫展などを相次いで開いている。カタカナの「ゴツボ」は、ちょっと目には「ゴッホと錯覚する」と、社長は笑いながら話してくれた。こんなところにも、社長の「遊び心」がうかがえる。

ゴツボギャラリーには、壁面の展示品のほかに、藍染めのハンカチ、のれん、テーブルセンターなどの小物が並んでいる。最近は各種のバッグにも力を入れている。また、女性用のロングベスト、男性用のシャツといった衣類にも需要が出てきたという。「自然素材や手づくりにお客様の目が向いてくるような予感がする」とは、社長の言である。(宮 健)

工房の名称／

(有)染屋たきうら

業種／

天然藍染め



●代表者／滝浦 輝夫

●設 立／明治42年

●従業員／4名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2345

●F A X／019-689-2398

●E-Mail／takiura@tezukuri.ne.jp

【工房の紹介】

初代の祖父が石鳥谷町に開業し、二代目の父成三、そして三代目輝夫へと技法は受け継がれております。地面に埋め込まれたカメの中で、すくも・木の灰・水などを仕込んで毎夕かきまわし、その液が熟成し布を染めるのにもっとも良い状態になる工程を「藍建て」と呼びますが、この木灰汁発酵建てという独自の技法により、伝統工芸の持つ美しさと現代的な機能を持った製品を製作しています。

【代表者の抱負】

私は現在盛岡手づくり村の副理事長（前・理事長）の職にあり、村全体の発展にも意を用いている。いま考えているのは、手づくり村で働いている関係者みんなが「もてなしの心を持つようにしたい」ということである。全国各地からおいでになる観光客や、リピーターの親子連れなどを心からもてなすために、まずは村内の植栽に力を入れている。花に囲まれて仕事をすれば、働く人たちの心もなごみ、お客様への挨拶や言葉づかいなどにも波及効果が出てくる。

来場者を増やすためには、それぞれの工房でやれることを、地道にやるしかない。うちの手づくり教室も、長いあいだの積み重ねで、ようやく定着してきたような気がする。お客様に、「手づくりの良さ」が認められてきた結果だと思っている。ゴツボギャラリーにも多くのお客様が関心を示してくださる。「この仕事をしていてよかった」「手づくり村に入ってよかった」と思えるように、これからもみんなと一緒にがんばりたい。

【作品・工房の作業風景】



(天然藍染) はんてん、のれん、ネクタイ、バッグ、のぼりなど



3. 有限会社盛岡せんべい店

盛岡を代表するみやげ品として、当社の「南部煎餅」「盛岡せんべい」をあげる人が多い。もともと「南部煎餅」の本場は八戸市と伝えられているが、ほぼ400年前に南部の殿様が青森県三戸町から盛岡に居城を移し、城下町にいろいろな職人や商人を各地から招き入れた。盛岡の「南部煎餅」にも、300年を超える長い歴史があると言われる由縁である。

当社のホームページを開いてみると、「当社は昭和28年、現在地において煎餅専門店として開業し現在に至っております。『南部煎餅』の伝統を守りつつその味を今に伝えてきました。」とある。社長・佐々木俊幸氏は2代目で、昭和63年に社長に就任している。

盛岡手づくり村に入村したときは先代社長（現会長）佐々木勇作氏が現役で、手づくり村入りを積極的に推進した。76歳の佐々木会長はいまもお元気で、手づくり村に毎日のように足を運んで陣頭指揮に当たっている。会長の自慢は、手づくり体験コーナーの床を昔風の「土間」にしたことである。土の柔らかい感触が、コンクリートにはない優しい雰囲気をかもし出している。これは、会長がかつて遠野市の民家を訪れたときに感じた体験を具現したものだという。

当社の本社は盛岡市本町通にある。同所には工場と住居があり、大通三丁目、フェザン（JR盛岡駅ビル）など市内に販売店が6ヵ所ある。従業員は工場・売店合わせて40人にのぼる。

当社を代表する製品としては、「南部煎餅」と「盛岡せんべい」の2種類があげられる。南部煎餅は、「胡麻・塩味」「胡麻・しょうゆ味」「豆・甘味」の3種類が主流で、素朴な南部煎餅の伝統を守り続けている。一方盛岡せんべいは、「水を使わず、バター・卵で練上げピーナッツを粒ごと使い、クッキー風に焼き上げました」と当社のホームページにあるように、現代風にアレンジした製品となっている。ピーナッツ（丸粒）のほかに、「くるみ」「抹茶」などの風味を生かした製品もある。さらに最近は、「盛岡手づくり村せんべい」の新しいブランド（登録商標）で、ほうれん草やにんじんなどの野菜入りせんべいも売り出している。生地にかぼちゃを3割入れた「南瓜っ娘（かぼちゃっこ）」も好評だという。

手づくり村の各工房は、文字通り「手づくり」が売り物であり、それぞれが「手づくり体験」ができるように工夫をこらしている。そんな中で当社の「煎餅焼き体験」は手軽で、いつも多くの観光客や親子連れなどで行列ができるほどの賑わいを見せている。小麦粉の生地を自分で丸くこねて鉄製の焼き器に入れると、3分ほどでほど良く焼ける。焼きあがったものはもちろんお客様が持ち帰るが、ほかにサービス品が1枚ついて、料金は100円である。

佐々木社長は現在50歳のまさに働き盛りで、協同組合盛岡手づくり村の副理事長を務めている。先代社長（現会長）も以前副理事長の職にあったので、親子二代にわたる副理事長ということになる。このほか、盛岡市大通商店街協同組合の理事にも名を連ね、多忙な毎日を送っている。

（宮 健）

工房の名称／

(有)盛岡せんべい店

業種／ せんべい菓子製造



●代表者／佐々木 勇作

●設 立／昭和28年

●従業員／9名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2562

●F A X／019-624-2562

●E-Mail／TS-GT3@echna.ne.jp

【工房の紹介】

南部煎餅の歴史（由来）は「その昔、建徳年間（1370－1372）に長慶天皇が南部地方を巡幸の際、日が暮れて夕食の用意もなくお困りの時、家臣の赤松が近くの農家から手に入れた「そば粉」を練って、鉄かぶとに入れて焼き、上から「ごま」をふりかけて天皇に差し上げたところ大変お喜びになりました。」これが南部煎餅の始まりと言われています。かめば噛むほど味のある南部せんべいの昔ながらの技を守りながら、現代の嗜好にもあったクッキータイプやにんじん、ほうれん草などを使った健康嗜好の方へ新しいお菓子の製作もしています。

【代表者の抱負】

私は大学を卒業してすぐ実家の家業にたずさわり、昭和53年から工場に入って職人としての道を歩んだ。社長を引き継いだのは昭和63年、33歳のときだった。そのころ先代社長は手づくり村の基礎づくりに忙しく、私も、本社と手づくり村工房、販売店などを目まぐるしく回る毎日だった。

手づくり村はお客様に手づくりの現場を見てもらい、手づくりを体験してもらう場であるから、どうしても接客が基本になる。中には、たった一度しかおいでにならない遠隔地からの観光客もある。こうしたお客様に、良い印象をお持ちいただくにはどうしたらよいかをいつも考えている。これは、手づくり村全体の課題だとも思っている。

来場者の減少や、土産品の販売不振などの現実をはね返すためにも、伝統を守ることや新商品の開発と合わせて、人と人とのつながりを大事にしていきたいと思っている。

【作品・工房の作業風景】



南部せんべい、盛岡せんべい、盛岡手づくり村せんべい



4. 北杜窯（ほくとがま）

代表の吉田勝弘氏は1952年青森県三沢市に生まれ、1975年岩手大学教育学部特設美術科を卒業、専攻は工業デザインで一時デザイン関係の会社に勤務したが、学生時代から埋蔵文化財発掘調査のアルバイトを通じて夢中になっていた焼き物を捨てきれず、愛知県立窯業訓練校を経て、京都の陶芸家・勝尾青龍洞氏のもとで古来朝鮮の技法「粉引」を学ぶ。

妻の優子さんは、山形県鶴岡市の出身で岩手大学教育学部特設美術科、愛知県立窯業訓練校で陶芸を学び、勝弘氏と結婚後、ともに1982年4月盛岡市上米内に「北杜窯」を開いた。

4年後の1986年5月、「盛岡手づくり村」に窯を移し現在に至っている。

「粉引」：鉄分の多い素地に、カオリンを主成分とした白化粧土を浸し掛けし、その上に透明な釉薬を施して焼成したもの。

焼き上がった時に、化粧土が厚く掛かったところと、薄く掛かったところの微妙な変化が面白いと語る吉田氏は、日々この技法をもとに「象嵌」や「掻き落とし」などの手法を取り入れ、新しい感覚と現代性を盛り込んだ、触れて温かみが伝わってくるような焼き物づくりを目指している。

「象嵌」：線彫をした中に素地色と違った白化粧土を埋めて装飾するもので、最も手間がかかる技法。

「掻き落とし」：生素地に白化粧土を刷毛塗りし、表面の水気が引いたところで、鉄筆や細く研いだ竹筆などを使って線彫りで文様を掘り込む技法。

湯呑み、コーヒーカップ、小鉢などの日常食器のほか、花器、酒器、最近ではペンダント、ブローチなどのアクセサリから、部屋のインテリアとしても人気の高い時計なども製作している。

一方で、一般観光客、修学旅行生を対象とした陶芸教室を開催しており、リピーターも多く、5月の連休、お盆の時期などは一日に参加者が100人を超すこともある。

陶芸教室は、粘土から成型し湯飲みやカップなどを制作する。A、B 2つのコースがあり、Aコースは350グラムの粘土で湯呑み・カップ・灰皿等、所要時間は約60分、料金は1,300円（団体1,200円）。Bコースは700グラムの粘土で、抹茶茶碗・菓子器等、所要時間は約60分、料金は2,100円（団体2,000円）となっている。作品は仕上げて約1カ月後に発送する。

申し込みは個人は直接工房へ、団体は10日前に地場産業振興センターに申し込む。

振り返ってこの20年間はやみくもに忙しく過ぎ去った。これからはもう少しじっくりと自らの作品づくりに専念する時間の余裕を持ち、よりいい焼き物、より多くの人に愛される焼き物をつくりたい。

今の二人の共通した願いだ。（山火 弘敬）

工房の名称／

北杜窯（ほくとがま）

業種／

陶芸



●代表者／吉田 勝弘

●設 立／昭和57年

●従業員／4名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2346

●F A X／019-689-2346

●E-Mail／hokutogama@nifty.com

【工房の紹介】

夫婦とも岩手大学特設美術科に学び、それぞれ瀬戸市、京都、花巻市等で修業。

土そのものの味わいを生かし、触れて暖か味の伝わる、やきものづくりを目指しています。朝鮮系の粉引（こひき）や、象嵌、掻き落とし、窓絵など伝統的な技法と新しい感覚を追求しております。

【代表者の抱負】

村全体として、もっと市民が気軽に来て自由にものづくりを楽しめるような施設にしたい。全国の手づくり村類似施設に比べ、わが村は観光の色彩は弱いですが、紛れもなく本当のものづくりの拠点である。このコンセプトを大事にしながら、村の仲間と共に創作活動を続けていきたい。また、若者の工芸に対する興味が希薄になっているように感じている。あらゆる機会をとらえて若者に工芸のすばらしさを伝えていきたい。

【作品・工房の作業風景】



花瓶、コーヒーカップ、皿、湯呑みなど



5. 有限会社薫山工房（くんざん）

手づくり村恒例の鉄器祭りの翌日10月11日代表の佐々木和夫氏にお会いした。佐々木氏は昭和20年盛岡市に生まれる。号を薫山と称する。

昭和47年浅田薫山氏に師事、昭和51年薫山工房及び号“薫山”を継承した。

手づくり村の原型であるX村構想を立ち上げ時の当初8人のメンバーの一人であり、当時、北山の南部鉄器（協）の共同作業所で修行を積んでいた。

手づくり村の鉄器工房5つのひとつで南部鉄器を製造している。経理担当の奥さんと入社11年目のお弟子さんが一人の3人で運営。

建設計画時の希望工房面積は50坪だったが、診断で半分に削られた。風呂もだめだといわれたが、今は各社それぞれ浴室を持っている。工房は必要に迫られ、平成5年20坪増築し、さらにショットブラストとコンプレッサーなどの設備を設置した。溶解は、材質を均質化するため自前の甗こしきで溶解している。

手づくり村進出の大きなメリットとして、

- ① お客さんの目に触れる機会が増えたこと
- ② 岩手大学教育学部芸術文化課程造形コース、岩手県立産業技術短期大学校産業デザイン科、岩手県工業技術センターとの連携が強まったこと

などがあげられる。

平成6年には「伝統工芸士」として通商産業大臣（当時）の認定を受けた。

伝統工芸士とは、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」により、伝統工芸（日本の伝統的技術を基礎に、現代生活に即した作品を創造し、新しい伝統を築くことを目指す工芸）の担い手として認定されたもので、盛岡に11人、水沢に9人いる。

共同で新製品を開発した。生活にマッチしたデザインとし、取っ手（つぎ弦）の重心を下に下げることで重さを感じさせない工夫をした。

沸かしたお湯をポットに入れる（以前は直接湯のみに入れるため、注ぎ口は小さいほうが良かった）ためできるだけ大きな口にした。傾ける時間が長いと重いと感じるので、注ぎ口を大きくすることで早く注ぐことができ、重さを感じる時間が短くなり負担が減少するということだ。

佐々木社長は、今年岩手で開催された「スポレク」にボーリング選手として出場し、所属チームは全国7位に入賞したという。（山火 弘敬）

工房の名称／

(有)薫山工房（くんざん）

業種／

南部鉄器



●代表者／佐々木 和夫

●設 立／昭和34年

●従業員／3名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2657

●F A X／019-689-2086

●E-Mail／k-official@nanbu93.com

【工房の紹介】

薫山は、父の号。別の業種から一念発起して三代目を継ぐ。伝統的な鋳型を使う焼型工法を堅持しながらも、消費者のニーズに合った新しいインテリア商品づくりも積極的に行っている。

【代表者の抱負】

手づくり村工房のよさは、製作工程や作業内容を村にきていただく多くの人にみてもらえること、そしてなにげない客との対話が製品開発の手がかりになる。そのためにもできるだけ遠くから多くの観光客に来て欲しい。

南部鉄器を芸術品としてではなく、庶民的なもの、気楽に使ってもらえるものとして提供していき、鉄瓶のよさをアピールし、伝統工芸品の風雅な味わいを普及させたい。

【作品・工房の作業風景】



南部鉄瓶、茶の湯釜、花器、インテリア用品等



6. 金田一製菓

代表、金田一博氏の妻和子さんと次男の克二氏にお会いした。

当工房は金田一博氏が盛高製菓に勤務の後、独立したが、工場敷地が他人のもので立ち退きを迫られていた。市から声がかかり進出することにした矢先、夫博氏が昭和61年4月脳溢血で倒れた。入院は半年ほどであったが、和子さんは夫の看病と自分の仕事、手づくり村への進出と激務が続いた。

当時は卸売り専門だったが、代表の病気のため取引を打ち切られたこともあった。

現在、博氏は回復し、和子さんの運転で週5日ほど工房に来て、製品の出来具合をチェックしている。

工房は、博さん夫婦に克二さん、娘婿の川村隆一さんと従業員1名である。

手づくり村進出後、工房内の間仕切りを変えたこと、包装設備（袋ものにシールを貼るシーラー）の設置、プレハブの小屋を設置するなどの投資をした。

主要製品の「たんきり」は南部特産の豆粉に水飴を加えて練りずっと以前は山野に自生する「タンキリマメ」の種子を粉にして混ぜたところからこの名がついたといわれている。

消費者の嗜好にあわせた2種類の「たんきり」を生産している。通好みの硬い「たんきり」と柔らかい「たんきり」で最近は柔らかいものが多く出るようになった。

他に売れ筋商品はラッキョウ飴、黒はっか糖である。

飴も今となっては材料から手作りは珍しいのではないか。

「らっきょうあめ」の原料は、{水飴・しょうゆ・白砂糖・塩}だが、まず、材料を煮詰め→流水で冷やす→飴を引き（空気を混ぜる）→ロールで伸ばす→球断器で切り→はさみで1個ずつ切るという工程だ。仕上がり具合のチェックは博さんの仕事である。窓越しに製作工程の一部始終を見学できる。

販売はすべて小売で金田一製菓の製品を購入できるのは、ここ手づくり村とつなぎ温泉の2つの旅館だけである。

克二さんは協同組合盛岡手づくり村の経済委員長として工房祭りの盛り上げや組合の共同販売事業の推進に積極的に活動している。

お邪魔したのは10月4日、この日は朝から小雨が降り続いてしたが、帰り際、この雨も止み、地場産業振興センターのロビーには観光客があふれている。聞くと、雨模様になると小岩井ルートから観光客が流れてくるという。

外には10台ばかりの観光バスがとまっていた。和子さんは「今日はめずらしくお客さんが多い」といっていた。（山火 弘敬）

工房の名称／

金田一製菓

業種／ 盛岡駄菓子製造



●代表者／金田一 博

●設 立／昭和37年

●従業員／5名

●所在地／岩手県盛岡市繫字尾入野64-102

●電 話／019-689-2020

●F A X／019-689-2020

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

古くから庶民に親しまれてきた盛岡駄菓子を、現代の生活にも合った製品にと新しい駄菓子づくりにも挑戦しています。

盛岡駄菓子は、ひとつひとつ手づくり。

あめづくりの大きな固まりから、なんども伸ばして小さなあめ玉になるまでは、何度みてもあきません。

【代表者の抱負】

今年、九州（熊本、大分）、四国（高知）、神奈川（藤沢、川崎）と全国5箇所の県産会社の主催する物産展に出店し、各地で手ごたえを感じている。

工房で消費者の意見を取り入れながら自分の工房なりの製品を作り上げてきた。これからも手作りに徹し、特に若い人に受け入れられるような駄菓子を考案していきたい。自分の工房の魅力を高め集客に努めたい。

【作品・工房の作業風景】



あめ菓子、たんきり、おこし、みそばん、かりんとう



7. 有限会社藤枝工房

藤枝行勇氏の職人人生は昭和20年10月からはじまった。南部鉄器の見習からスタートしたが、昭和45年には藤枝工房として独立し、平成3年には有限会社に法人成りして現在に至っている。

昭和61年5月の盛岡手づくり村に参加した当初は、国などから借りた資金を返していけるだろうかなどいろいろと不安があった。2人の息子さん（長男 宗雄氏 三男 由男氏）が後を継いでくれることになり、これなら何とかやっていたと思った。

この後継者達が南部鉄器の伝統に新しい角度から活力を注ぎ込んでくれている。

盛岡手づくり村にきて20年経過したが、苦節の弟子の時代とは変わり、地道にコツコツとやり冒険などは無縁でやってきた。鉄器づくりの仕事は楽しいとのことである。

職人氣質は無口がモットーのように生きてきたが、開村当時は全国から見学者が多くきて話をかけられるのがつらかった。

それでも、仕事は遣り甲斐があり、その頃はあまり疲れを知らず夢中になってやってきた。70歳を超えて疲れもでてきた。お蔭様で平成4年には伝統工芸士の認定をうけ、平成10年には県の卓越技能章をいただき、本当に有り難いと感謝している。

訪問して驚いたことであるが、三男由男氏が来店客に南部鉄器の使い方を現代科学の目でみて分かり易く説明している。

鉄瓶を使えばお茶がおいしく飲めるとか、健康から見て現代人の不足する鉄分補強によいこと。どこの家庭にも、物置の奥に鉄瓶が死蔵されているので、壊れた鉄器であっても廃棄せず、藤枝工房にもってくれば修理が可能であり、これを活用したほうがよいこと。

最近では新しい住宅はオール電化が進んでいる。この電磁調理器（IH）に対応して鉄瓶の底の部分のデザインを変更した。これはお客様の意見を取り入れた結果である。新しい角度から鉄瓶の活用の拡大につとめている。鉄瓶に抱いている古い感覚を一新するものである。

開村当時は、店内に茶室を設けお茶のサービスなどもしていた。観光客は村内を歩き、一休みして、一服のお茶をご馳走になれば、心も自然となごむ。よいアイデアだと感じた。

また、インターネット販売をやっており、ネットでもお得なショッピングができる。

日本の伝統的工芸品でありまた盛岡市の代表的な地場産業である南部鉄器、職人藤枝行勇氏の後継者が新時代に適応したセールスを展開していた。

店頭で説明する由男氏から、無口の職人のイメージとかけ離れた新時代の職人という印象をうけた。（吉田 匡）

工房の名称／

(有)藤枝工房

業種／

南部鉄器



●代表者／藤枝 行勇

●設 立／昭和45年

●従業員／4名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2607

●F A X／019-689-2607

●E-Mail／hujieda-coubou@tetubinn.com

【工房の紹介】

伝統的な鋳型を使う焼型工法の鉄瓶を主に製作。

中でも花屋町・寺の下など城下町盛岡の旧町名を表面に綴った鉄瓶は人気が高い。二代目の長男や次男とともに家族で鉄瓶づくりに励んでいる。鉄瓶・湯釜をお求めの方に茶室にて、お抹茶をサービスしている。

【代表者の抱負】

ここまで400年培ってきた南部鉄瓶を無くしてはならないと思っている。これからも頑張っていきたい。平成14年春の叙勲には天皇陛下から勲6等瑞宝章をいただき、身にあまる光栄だと思っている。これは、多くの方々のお蔭で評価していただき、本当に有り難いことだと感謝している。今後も生活のためでなく、立派な作品を遺していきたい。

後継者も育っているの、大好きな仕事をこれからも続けたい。

【作品・工房の作業風景】



南部鉄瓶、茶の湯釜、花器等



8. 田中絃（つる）工房

盛岡手づくり村は設立20年をむかえるが、協同組合盛岡手づくり村の組合員のなかで、唯一組合員が変わった工房である。

組合発足当時は柴田つる工房（代表柴田長一郎氏）であったが、その後弟子の田中二三男氏が事業を承継し現在の田中つる工房となった。

初代の柴田氏（平成8年度、国から卓越技能者表彰）は今年72歳で健康に優れず引退したので、設立当時の有様を直接お聞きすることはできなかった。（平成17年11月1日逝去）

柴田長一郎氏の盛岡手づくり村設立10周年記念誌「この10年の思い出」によると工房に移転する前は、盛岡市内の組合共同作業所で鉄瓶の「つる」の製作にあたっていたが、昭和60年頃の共同工場は建物の老朽化や公害問題などがあり、工房が盛岡手づくり村に移転することに決まったときはどこで働くのも同じと、特に不安はなかった。しかし、当初は観光客にじろじろ見られるのは気持ちいいものではなかったと回顧しておられる。

柴田つる工房は、長年柴田氏が一人で仕事をやってきたが、平成2年田中二三男氏を初めて弟子として採用したときは、地元マスコミから多くの取材があり、NHKなどで全国に放映されたり、つる師の後継者が決まったとして話題になった。

柴田氏から田中氏への事業継承は、親族以外の者が事業を引き継ぐという意味で数々の課題があったが、親方（柴田氏）の田中氏に対する並々ならぬ信望と愛情が深かったことに加え、協同組合盛岡手づくり村の暖かいバックアップもあってスムーズにできたという。

田中二三男氏は昭和28年生れ、学校卒業と同時に当時の国鉄盛岡工場に養成工として採用され、ここで旋盤、ハンマー、ヤスリなど基礎技術を習得しており、「つる」の製作には、全く苦勞を感じなかったということである。根っからのもの作り職人である。

いまの田中二三男氏は盛岡でただ1人の「つる」職人である。全国的にみても、ほかには水沢と山形にしかない貴重な存在である。最近では、山形からも「つる」の注文がくるようになったとのことである。

製品は鉄瓶の「つる」、茶道具、灰ならし、五徳など古くからの伝統鉄器製品が中心で、全て注文生産である。

先日、盛岡手づくり村で南部鉄器祭りが開催され、田中二三男氏もそこに作品を展示していた。作品名は「手燭A、B」である。実物があると分かり易いが蝋燭たてである。従来の伝統製品にはとらわれず、全く新しい感覚のデザインとなっていた。

現在工房は1人でやっている。岩手県工業技術センターからのアドバイスや指導なども取り入れて、地道に活動が続けている。（吉田 匡）

工房の名称／

田中鉦（つる）工房

業種／

鍛造



●代表者／田中 二三男

●設 立／平成13年

●従業員／1名

●所在地／岩手県盛岡市繫字尾入野64-102

●電 話／019-689-2656

●F A X／019-689-2656

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

南部鉄瓶は本体に鉦が取り付けられて、はじめて完成します。その鉦を手づくりでつくっている唯一の工房。いわゆる村の鍛冶屋さん。鉦の種類は、大きく分けて中が空洞の袋鉦と鉄の棒をそのまま加工するむく鉦があります。

【代表者の抱負】

親方から教えてもらったものを次の世代に伝えたいと考えている。見所のある人が必ずいると思うので、この伝統技術を伝えたい。後継者が十分生活していけるだけの仕事を保証できないことに悩んでいる。

子供らには、事業を継ぐ意思はないようだ。

後継者を確保し育成することが、これからの一番の仕事だと思っている。製品の販売については、すべて注文生産が中心となっており心配していない。

【作品・工房の作業風景】



南部鉄器の鉦、花器、インテリア製品等



9. 有限会社菓子工房

(有)菓子工房は村内順回路のほぼ中央の角地で、観光客の通路から店内がよく見えるところに立地している。

当社の代表取締役社長の佐久山昌也氏は、当時を振り返り、開村当初は観光客が多く、菓子が売れて大変であった。お客さんの行列ができ、菓子をつくるのが間に合わなかったという。オープン時は、お茶餅を盛岡名物の看板商品とし、串団子（醤油、餡、胡麻）に蒸し饅頭（地酒、笹、蕎麦）などを取り扱った。現在は中止しているが洋風煎餅（ゴーフル）なども売った。予想を超えて増加した観光客に対応するため、パートを採用し、設備も導入した。

最近の売上げは開村当時より減少している。手づくり村の魅力を新鮮なものとすることや、店員の接客マナーなど反省しなければならない点もある。

扱っている商品も大型店やスーパーなど、どこでも買えるようなものではなく、手づくり村らしい、来店客に喜ばれ楽しんで貰えるようなものをと工夫し事業を展開してきた。

例えば、社長が考案した「手づくり団子」がある。

団子の生地にお客様が好きなようにたれをつけて食べられるようにしたもので、たれは餡、粒餡、醤油、胡麻の4種類とした。最初はたれを多めにつけるのではないかと余分に準備したが、予想したほどではなかった。

次は「手づくり饅頭」を考案した。これも好評で、作り方は、そばで店員が実際に指導しながらお客様に思いおもいの饅頭を作ってもらうもので、題材は流行の漫画、動物、パンダ、花、友達顔など、お客様が自由に楽しんでいる。

西根町の田頭小学校からは先生が毎年生徒を引率して来ていただいている。

土日よりむしろ平日のほうが混むのはインターネットの影響もあるのかと思われる。

開村当初から継続しているお茶のセルフサービスがある。ちょっと疲れたので店でお菓子を買って、お茶を飲みながら休憩していく。使った茶碗は各自洗うルールになっている。なかなかよいアイデアではないかと思われる。

以前はコーヒーや甘酒をサービスしていたが現在は取りやめているという。

開村当時のような売上げを維持するには魅力のある商品の開発が欠かせない。佐久山社長は、アイデアを女子学生や主婦のモニターに期待している。

この手づくり村には大きな夢をい込んでいる。佐久山社長は「桃源郷づくり岩手県民運動」でも活躍しており、手づくり村にも自費で桃の苗を買い、文字通り桃源郷にしたいと考えて活動している。また、手づくり村にきたお客様のため、自費で150本の傘を寄付されている（消耗した分は補充している）。地域や来村客への思いやり、心遣いには大いに感心させられた。（吉田 匡）

工房の名称／

(有)菓子工房

業種／ もち菓子製造



●代表者／佐久山 昌也

●設 立／昭和58年

●従業員／6名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2461

●F A X／019-689-2461

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

盛岡名物「お茶餅」は、形がうちわに似ているところから、うちわもちがなまって「お茶餅」、あるいは、お茶うけのお菓子として出されたところから「お茶餅」と言われるようになったといわれています。伝統的な和菓子製作を中心に現代の味と形も追求しています。

【代表者の抱負】

社会奉仕活動に関心をもっている。手づくり村を開村当時のように観光客が多く活気のある村に活性化したいと考えており、手づくり村の環境を整備したい。

周辺環境の整備とヒット商品の開発に夢をかけている。

いま80歳。これからの余生は社会貢献に生きがいをもって活動していくこと。心身ともに若いものに負けずに、これからも頑張っていきたい。

【作品・工房の作業風景】



お茶もち、豆銀糖、からめ餅、南部招福餅、ゆべし、まんじゅう詰め合わせ、団子



10. しばた工芸

「しばた工芸」は竹細工の工房である。店頭にはいろいろな形をした竹細工製品が並んでいる。丸ざる、買物かご、豆腐かご、茶碗かご、びく、一輪挿し、花活けかご、文庫など種類が多く、年配層なら一つ一つに郷愁を感じるものばかりである。そのほか、昔ながらの大きい竹行李がいくつか置いてある。京都の呉服屋さんからの注文とのことである。

体験教室で竹細工作りをしていると、店頭に入ってきた観光客の「なつかしい」「これは使っていたことがある」「あれは実家で見たことがある・・・」などの会話が聞こえてくる。若い人たちからは「何に使うもの？」という質問も多いようである。

体験教室では、竹細工のエンピツ立てを作ることが出来る。所要時間は約1時間。あらかじめ用意された材料をかご状に編んでゆくものであるが、丁寧に教えてくれるのでびっくりするほどの作品が出来上がる。竹細工教室のいいところは、出来上がった作品をすぐ持ち帰れることである。帰りの車の中でも、家に帰っても、すぐに取り出して体験の感動を話題にすることができる。編みあげるときの体験は、竹工芸品の作品観賞の際にも役立ちそうである。

「しばた工芸」の製品は、岩手県北の二戸地方特産のすず竹を使用して作る。すず竹は一戸町鳥越の竹細工の材料でもあり、寒冷地特有の竹である。このすず竹の外側の皮だけをタテに4つに割り、内側の肉部分は取り、日に干して乾燥させたものを使用する。この材料で作った製品は丈夫で水にも強く、驚くほどのしなやかさがある。

「しばた工芸」の柴田隆典氏は、岩手県北の二戸で竹細工製品を製造販売していた経験を持っており、盛岡手づくり村開業の時にここに工房を移した。奥さんの柴田禮子さんは体験工房での指導も担当している。柴田隆典氏は両親から指導を受けたが、父の柴田勝四郎氏は昭和18年仙台にあった商工省工芸指導所に研究生として入り、地元鳥越に帰って竹細工に数々の工夫を加え、地域の指導に貢献した人である。母スキさんも昭和59年卓越技能章を受賞している。

平成17年8月のことであるが、毎日放送の人気テレビ番組の「ちちんぷいぷい」で、「しばた工芸」の買い物かごが紹介され話題となった。スーパーマーケットのレジ袋有料化関連の特集番組で取り上げられものである。その直後、関西方面からの注文が急増したが、その時期は原材料の端境期にあたり、発送の対応に追われていた。注文書の中には、祖母に懐かしい竹細工を贈りたいという添書きがあるものもある。竹細工の買い物カゴは従来から隠れた需要を持つ商品であるが、エコバッグ代わりというよりは、思い出の良品需要とみることができよう。

古い歴史を持つ商品であり、手づくり村を全国的にPRする良い機会としたいものである。
(森 肇)

工房の名称／

しばた工芸

業種／

竹細工



●代表者／柴田 隆典

●設 立／昭和20年

●従業員／2名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2736

●F A X／019-689-2736

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

原料の竹は、岩手県の県北二戸地方の特産の南部鈴竹。寒冷地特有のしなやかさがあり、とても丈夫です。鈴竹は長さが1.5メートルから2メートルになりエンピツよりも少し細目です。この鈴竹の外側の皮をはぎ、縦に4つに割り、その内側の肉の部分进行ナタでしごいて取り、皮だけにして日に干して乾燥させます。製品はとても丈夫でしなやかです。その秘密は材料を作るとき竹の皮をナタでよくしごき、柔らかくしていることにあります。その丈夫さは、力を入れても押しても、決して壊れないほどです。また、水にも強いという利点があります。

【代表者の抱負】

開店以来早20年経ったが、景気の変化もあり当初よりは静かな面も見られる。最近感じる事はPRの力で、PRは大きく販売の力になる事を感じている。平成17年にはテレビの放映によって電話やFAX、インターネットなどによる注文を頂いた。良い商品を提供することを続けていくことが大切であると感じている。時代の変化をよく掴んで変化に対応できるよう心掛けていきたい。

今後とも手づくり村をますます充実したものにし、多くのお客様をお迎えして、皆様に喜んでいただけるよう頑張っていきたい。

【作品・工房の作業風景】



とうふかご、花かご、買い物かご、びく



11. 合名会社照亦製作所

照亦製作所は、伝統工芸品である南部鉄瓶をはじめ、鉄鍋や急須、アイアンケトルなどの南部鉄器を製作販売している。屋号の「照光堂」は創業者照井亦八の命名である。昭和61年の手づくり村オープンと同時に参加し現在に至っている。

工房の店頭には南部鉄瓶から風鈴などの小物にいたるまで多くの種類の製品が並んでいる。これまでの見慣れた南部鉄瓶や鉄器のなかで目立つのは、新感覚のデザインのケトルや、鉄器とは見えないブルーやライトグリーンに着色された急須類などである。輸出向けのカタログには赤や黄色のものもある。当社の商品種類は多く、建築金物や大きなものは街路灯やフェンスなども手がけている。

工房はかなりの広さがあり、奥には材料の鉄を溶解するコシキ（小型熔鉄炉）がある。見学コースを歩いて南部鉄瓶の製作工程を間近に見学することができる。

体験教室では、記念手形づくりや、ステーションナリー（小型のトレイなど）づくりなどのコースがある。トレイなどの場合は石膏の原型に文様やサインを彫りこむ過程を体験する。後日この型に職人が鉄を流し込み、製品完成後、体験者の手元に送付される。

南部鉄器は伝統的なイメージが強いが、新しい生活様式に合わせて電磁調理器に対応した鉄器鍋やアイアンケトルなどの商品も生れている。社長の出口宏氏は、「3、4年前から米国では日本茶ブームがありカラフルな急須などに関心が出てきており、ヨーロッパ向けにはティーポットの需要がある。日本でもファッションデザイン感覚で若い人が買い求める傾向も出てきたように感じられる」と話している。そして、ものづくりは何よりも消費者のニーズを的確に掴むことが大切で、伝統工芸は特にその対応が遅れがちであり、すみやかに対応していく必要性を強調している。

出口宏氏が専務理事でもある南部鉄器協同組合（組合長岩清水晃理事長）の作成したユニバーサルデザインの鉄瓶は2005年度のグッドデザイン特別賞を受賞した。伝統工芸品である南部鉄瓶のもつ重さや形状に工夫を積み重ねて、誰もが使いやすいものを目指してきた新しいデザインの商品が評価されたものである。照亦製作所も組合の一員として、常に新しいデザインのものを開発して商品化する意欲にあふれていた。

照亦製作所の創業は、明治の後半盛岡市六日町（現肴町）に旅館とお茶の店を営んでいたのが始まりである。お茶の販売とともに茶器、鉄瓶も扱うようになった。隣地に鉄瓶工場も持っていたが、その後工場は餌差小路（現南大通）に移転し、昭和30年代に出口氏がその経営に参加した。手づくり村オープンと同時に盛岡市内にあった他の工房とともに移転して参加したのである。

南部鉄器の名称は、盛岡手づくり村を全国的に発信するとき必須のものであり、今後の活動は大きな役割を担っている。（森 肇）

工房の名称／

(合名) 照亦製作所

業種／ 南部工芸鉄器



●代表者／出口 宏

●設 立／昭和16年

●従業員／15名

●所在地／岩手県盛岡市繫字尾入野64-102

●電 話／019-689-2311

●FAX／019-689-2312

●E-Mail／terumata@cameo.plala.or.jp

【工房の紹介】

明治年代より南部鉄瓶の販売を業として創立され、以来南部鉄瓶を始め、種々の工芸鉄器を開発製造して現在に至っております。鉄瓶等の焼型工法と鍋や風鈴などをつくる生型工法を手がけており、通常は月・木・土曜日の午後に（祝日等によりその時々で変更あり）「湯」と言われる鉄の溶解作業を行っています。製品は国内一円と海外にも輸出されております。

【代表者の抱負】

開村以来20年、お客様のニーズも変化し、生活環境も様変わりしてきている中、製品も変革の時期に来ている。伝統工芸品の製作技術を次世代に引き継ぐためにも確実にマスターし、その伝統を堅持しつつ現代生活に合った製品開発を実現することが緊急の課題である。

南部鉄器協同組合は、ユニバーサルデザインを主眼とした新たな南部鉄瓶の共同開発に取り組む、3年かけて製品化を実施した。その製品がグッドデザイン賞に選定された。特に日本商工会議所会頭特別賞を受賞できたことは、今後の伝統工芸品の有り様への一つの指針と考え、誰にも使いやすい製品の開発により、新たな顧客開拓、売場開拓に努めていきたい。

国内は需要低迷の中にあるが、鉄器製品の有用性をPRし、家庭での利用を喚起できるようなデザインや着色を考えた製品へチャレンジし、海外へ向けては積極的に輸出部門の強化を図っていきたい。

【作品・工房の作業風景】



南部鉄瓶、茶の湯釜、花器、灰皿、鉄鍋、風鈴、インテリア・エクステリア用品、記念品等、幅広く製作



12. ぴょんぴょん舎冷麺工房（株式会社中原商店）

平成17年4月26日、盛岡手づくり村に新たに体験型の工房「ぴょんぴょん舎冷麺工房」が開店した。盛岡手づくり村としては一番新しく、昭和61年の開村以来15番目の工房である。

今回開店したぴょんぴょん舎冷麺工房は、冷麺、スープおよびキムチなどの製造工場となっており、この製造工程は常時見学できる施設となっている。ここで製造された冷麺商品はテイクアウト商品として全国にも販売されている。

冷麺工房1階には体験教室があり、盛岡冷麺の麺づくりから盛りつけ、試食までを体験することが出来る。専門のスタッフがサポートし、所要時間は約20分、一度に20名が体験できる。そのほか1階にはキムチとスープ製造の作業室がある。

また、2階にはギャラリースペースがあり、自然の光をうまく取り入れたギャラリースポットで絵画や古い製麺具などを見ることが出来る。

開店まもない平成17年8月11日にはテレビの人気番組「新どっちの料理ショー」で、邊社長も出演して讃岐うどんとの対決場面が放映され、全国的に話題となった。これを見て来店するお客様も多いという。

ぴょんぴょん舎は盛岡冷麺で有名なお店で、株式会社中原商店の経営である。当社はすでに今回開店の工房のほか盛岡市内に焼肉・冷麺等のレストラン6店で営業している。

邊社長によると、この盛岡冷麺は平壤冷麺がルーツとされ、平壤にふるさとをもつ料理人が盛岡でつくったのが始まりといわれている。その後盛岡の人に合う冷麺に改良が続けられて盛岡特有の味のものになり、平成12年には、盛岡冷麺に「本場」「名産」などの表示が出来るようになった。

盛岡冷麺の特徴は、コシの強いシコシコした麺であり、原料はでんぷんに小麦粉を加えたものである。これに独特なスープを注ぐ。具はゆで卵、煮込んだ牛肉のスライス、スイカ（もしくはナシ）、長ネギのほか好みでキムチを入れる。盛り付けも独特である。

冷麺の人気は業界ぐるみの絶えざる改良工夫によっているが、常にお客さまのニーズにこたえる姿勢がうかがわれる。

株式会社中原商店（邊龍雄社長）の創業は昭和30年で、昭和58年に法人化している。

抱負に述べられているように、美味しさの世界の追求を掲げ、そのためには人材育成を重視し、社員教育に力を入れている。それだけでなく、障害者の社員指導援助体制を整備して障害者雇用を実現し、県の表彰のほか、平成13年にはこれまでの実績が評価され、障害者雇用優良法人として厚生労働大臣表彰を受けている。

今や全国的に有名になった盛岡冷麺の工房の開店によって、盛岡手づくり村に新たな活力が生まれることが期待される。（森 肇）

工房の名称／ **びよんびよん舎冷麺工房（株）中原商店**

業種／ 冷麺製造、販売



●代表者／ 邊 龍雄

●設 立／昭和30年

●従業員／ 51名

●所在地／岩手県盛岡市稲荷町12-5

●電 話／019-691-7611

●F A X／019-691-7522

●E-Mail／pyonpyon@pyonpyonsya.co.jp

【工房の紹介】

冷麺のルーツは朝鮮半島の北西平壤です。寒い地域に伝わる冬の料理です。盛岡も気候的には共通しており、盛岡で冷麺を作ってみたのが盛岡冷麺の始まりです。北緯40度の風が運んだ冷麺は、それ以来コクのある盛岡特有の味に変化しながら、現在多くの方々に愛されるようになりました。冷麺工房は常時製造工程が見学できます。又1階では冷麺づくりを体験することができます。ぜひ体験してみてください。

【代表者の抱負】

「人に愛され喜ばれる、美味しさの世界を創造し、過去から現在、未来へと時空を越えた食のロマンに夢を託す」の企業理念を掲げ、盛岡冷麺を通して、味・接客サービス・食空間において日本一の店を目指している。

そのため、お客様、得意先、仕入先、手づくり村の方々と情報交換を積極的に行い、ビジネスパートナーとしての関係を強化し共栄共存をはかっていきたい。

また、街づくりやボランティア支援活動に参加するほか、企業の社会的責任を重視し、高齢者、障害者の雇用にも努めていきたい。

【作品・工房の作業風景】



盛岡冷麺



13. 有限会社中千家具製作所

中千家具製作所の展示場でまず目に入るのが、伝統的工芸品に指定されている剛直にして優美な岩谷堂箆笥である。その奥の作業所は広く、木地加工、漆塗り、金具製作などの各工程に12名の職人がきびきび働いている。伝統工芸士や1級技能士等の資格を有し、岩手の樺や桐などの優れた素材を使い、きめ細かな漆塗り、手打ち彫金、南部鉄器金具を取り付け、伝統的製造技法を守り進化させている。

代表取締役社長の中村千二さんは、20歳で木工職人になり、昭和42年に独立し、盛岡市南仙北町で家具工場を始めた。工場が老朽化、狭隘化していたため、盛岡手づくり村建設にその先頭にたって参加した。54歳の時である。温厚で実直、責任感の強い人柄から、組合員の信望も厚く、長年協同組合の理事長を務めた。14の工房が揃って20年もの歴史を刻むに至ったのは、各社のたゆまぬ技術向上、経営努力とともに、組合の結束を図った中村社長の尽力が大きい。

当社が、そもそも江刺市が本拠地の岩谷堂箆笥を、盛岡市で1社だけ始めたそのきっかけは、江刺市の業者と同じ東京の間屋に属し交流していた縁で、独立して間もなくの頃、意気投合し一緒にやろうということで仲間になったのだという。

当社の代表的製品は、岩谷堂箆笥などの民芸家具のほかに、伝統的な製造技術を応用し製作している一般家具のテーブル・椅子や小物の注文家具などである。またパソコンとレーザー彫刻機を連動した先端技術を駆使して、桐材に宮澤賢治等を彫刻した「木製ハガキ」や切抜紋様の「行灯」なども作っている。いずれも一つひとつの製品に職人の技と心がこめられた優れものである。

昨今、家具業界は、生活様式や住宅仕様の多様化、消費者ニーズの変化にきめ細かく対応していくことが求められている。このため、当社も加盟している岩谷堂箆笥生産協同組合（中村社長は副理事長）では、若手を中心に平成14年度から3ヵ年事業（国県の補助）で、消費者ニーズに対応した新製品開発、新しいデザインづくりに取り組んでいる。また、これまでの県内、東京での展示会に加え、ニューヨークの見本市に初参加するなど、業界自体として主体性を発揮し新たな需要拡大、販路開拓に努めている。当社は、本事業に職人の技術の総力をあげて取り組み、新しいデザインによる新製品として「花台」「ハイボード」「片袖机」や、組合の新企画、薔薇シリーズに対応した「薔薇チェスト」などの製品を試作、開発した。

一方、江刺市、岩手大学との産学官連携にも取り組み、毎月の研究会開催や新しいデザインの箆笥や小物家具などの共同開発を行っており、当社の職人の技術、技能のレベルアップに繋がっている。

中村社長は、「経営者であり職人であるという二足のわらじを履いてやってきたが、そろそろ後継者に経営を譲り、職人の教育に専念したい」と決意を語り、新たな戦略展開を企図している。
(齊藤 静夫)

工房の名称／

(有)中千家具製作所

業種／

民芸家具



●代表者／中村 千二

●設 立／昭和42年

●従業員／15名

●所在地／岩手県盛岡市繫字尾入野64-102

●電 話／019-689-2151

●F A X／019-689-2152

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

岩谷堂箆笥は昭和57年3月国の伝統的工芸品に指定されました。民芸家具を代表する地場産品として高い評価を受けており、江刺市の業者と中千家具製作所など盛岡市にある業者で、岩谷堂箆笥生産協同組合が結成されております。岩谷堂箆笥に使われる材料は、樺、桐、栗、杉です。岩手県内では北上山系に良質の樺が多く、その明瞭な木目と、強い材質を誇る樹齢300年以上のつき板が岩谷堂箆笥の重厚な表面を形づくりします。内部には南部桐と呼ばれる桐の無垢材が使われており、美しい肌理と狂いのない桐の特性が大切な衣類を永く守っていきます。(有)中千家具製作所では、お客様のお住まいに合わせた注文家具をつくっております。

【代表者の抱負】

新たな生産基盤を求めて、盛岡手づくり村に参加し、20周年を迎えたことは、本当に感慨深い思いで一杯である。当社は、伝統的技法に一層磨きをかけながら、新しい生活様式や住宅仕様の変化・多様化に対応した家具を製作し続けてきたが、今後は、売れるものづくりのために、生活者ニーズを的確につかみ、何をどう作ればいいのかを常に考える職人を養成していくことが急務であると考えている。私自身、そういう考えでものをつくれる職人の教育、育成に専念してまいりたい。

【作品・工房の作業風景】



岩谷堂箆笥、テーブル、椅子、小物、注文家具



14. みちのく工房

みちのく工房に入ると、金銀紅紫の装束に鈴をつけた「チャグチャグ馬コ」、金の延棒をぎゅしり詰め込んだ千両箱を背につけた「金のべごっこ」が目に入ってくる。いずれも南部の地、岩手の歴史と伝統の中で生まれ、郷土の誇りと文化の香りを凝縮した民芸品である。

当工房は、代表者の大森信政さんと妻の江子さんが二人三脚で郷土玩具づくりをしてきた。店頭奥の工房では若い職人が木地づくりや彩色・飾付けに取り組んでいる。手先が器用で、手づくりが好きであれば十分やっつけられる夢のある仕事だと、大森さんは確信している。大森さんがこの道に入ったのは自然の成り行きであった。そもそも彫刻家で馬に愛着と信仰を持った父の市四郎さんが、安代町で馬彫りを始め、昭和36年に玩具づくりを創業。これを子供の頃から見ていつの間にか自分も木を削り始め、そして昭和40年に後を引き継いだ。盛岡市に居を構え本格的に取り組み始めた頃、岩手国体や植樹祭などの全国大会の開催を契機に郷土玩具への人気が高まり、主として県産会社や旅館ホテル、民芸品店への卸販売を行う一方、県内外の物産展などで実演販売を行ってきた。

大森さんは、自分の工房に観光客などのお客様が立ち寄り、直接お客様の顔が見える拠点をもちたいとの思いは強く、一時、松尾村に「チャグチャグ馬コ」レストランを開店するほどの熱の入れようであった。盛岡手づくり村建設構想がもちあがった時は千載一遇のチャンスととらえ、発起人として参加した。46歳で入村以来、念願であった作り手とお客様の顔が見える工房として、地域住民や観光客を癒す郷土玩具を作り続けて20周年を迎えた。

盛岡手づくり村への来場者のニーズをくみ取りながら、これに対応するため、これまでの主力商品や白木玩具、干支人形に加え、クリップものや携帯ストラップなどの新しい商品作りにも力を入れている。

一方、経営基盤の一層の安定を図るため、現在、来場する観光客の増減に影響されない分野の玩具について開発を検討しており、保育園や幼稚園向けの木工乗物等の玩具を試作、研究中である。このため、同業者と盛岡木工玩具研究会を発足させ、岩手県中小企業団体中央会の戦略的連携強化指導事業を活用し、デザイナーの派遣を受けながら新製品の共同開発に取り組んでいる。桐などの軽く柔らかな素材や人体に無害の塗料を使用して、幼児に優しい遊具を開発、県内はもとより広く全国に向けて事業展開できないか、夢を大きく持ち具体化への検討を重ねている。

後継者については、まだまだ現役でやれるとしながらも、休日にはお手伝いに来ている娘さんに継いでもらいたいと期待している。子供らに喜びと夢を与える手作り教室を開催しながら、新たな商品開発を目指す玩具職人の挑戦はこれからもさらに続く。(齊藤 静夫)

工房の名称／

みちのく工房

業種／

郷土玩具



●代表者／大森 信政

●設 立／昭和36年

●従業員／4名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2065

●F A X／019-689-2353

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

みちのく岩手は馬の産地。盛岡周辺の南部曲り家では、人と馬が同じ屋根の下に住んでいました。これは馬がとても大切にされ、愛されていたことの現われです。また岩手の代表的民謡「南部牛追い唄」に『田舎なれども南部の国は西も東も金の山』とあります。岩手の歴史の中に育てられ、郷土の誇りと香りを凝縮した「チャグチャグ馬コ」や「金のべごこ」を手近な玩具として製作しています。また白木の玩具は、これからの製作活動のテーマとして、幼稚園・保育園とのコミュニケーションを大切に、オリジナルな物も考えております。

【代表者の抱負】

これまではお客様の顔が見えにくい卸販売が中心であった。盛岡手づくり村に参加できて、お客様に作り手の顔が見え、特に子供さんに喜んでもらえる商品づくりができるようになり、非常に嬉しく思っている。20周年を契機に、チャグチャグ馬コなどの木彫り・彩色・装束で飾り付ける技法を守り育てつつ、アイデアや工夫をこらし、保育園向け玩具の開発など新たな製品開発に挑戦してまいりたい。

【作品・工房の作業風景】



チャグチャグ馬コ、金のべごっこ、
ジグソーパズル、木工小物



15. 雫石民芸社

雫石民芸社を訪れると、二人の女性が木の皮を使ったカゴづくりなどの手づくり作業に精を出していた。代表者の階^{しな}美栄子さんと娘さんである。当民芸社の代表的な商品は、「雫石あねっこ人形」「盛岡さんさ踊り人形」や「くるみカゴ」、そして昔ながらの各種「わら細工製品」などである。

階さんが、現在の人形づくりを始めたきっかけは、昭和20年代後半農家の嫁にきたときに始まる。雫石地方では、南部よしゃれ姿の作業着が一般的なスタイルで非常に働きにくかったので、これを働きやすい野良着に作り替えたなら忽ち若妻会に普及し、いつしか伝統的な南部よしゃれの姿が消えてしまった。これは大変なことをしてしまったという思いと、父が元祖南部よしゃれの座敷踊りの伝承者であったこともあって、昭和30年頃から農作業のかたわら紺紬の野良着に編み笠姿の「雫石あねっこ人形」の製作を始めたものである。

これが当時の地域の幼稚園長から本格的に作り始めたらと勧められ、商品化にふみきり、県産会社や旅館ホテルへの卸販売、さらには岩手国体の推奨品となり、県内外の物産展などにも積極的に参加するようになった。

盛岡手づくり村には、行政などからの強い参加要請と家族の後押しもあって決断し、あっという間に20周年を迎えた。現在、工房は30年前から人形づくりに携わってきた女性に、3年前から加わった娘さんも含めた3名で運営しており、これに農業従事のかたわら、「つまご」などのわら細工や材料の調達をしている夫と、出張手づくり教室を担当している息子さんが手伝っている。また店頭は、娘さんの作るドライフラワーなどで商品陳列にも変化がでてきた。

平成7年と16年に県産業祭りで2度も賞を得た、胡桃の木の皮で作った手さげカゴには、思い出がある。これを作るきっかけは、ある日、民芸品づくりで全国的に名の知られた達人、衣川村の菅原春蔵さんが91歳の高齢をおしてわざわざ出かけてきて、木の皮の取り方、カゴの作り方を教えてくれたことだ。階さんなら自分の技術を伝承してくれると信じてやって来てくれたのではないかと、階さんは、当時の不思議な出会いと指導に感謝していると言う。

今では、後継者である娘さんが、手さげカゴを現代風にアレンジし、おしゃれな商品になった。高価なものだが、都会では珍重されている。今後は、楓や柳などの皮も使いいろんな素材のバッグを作りたい、次はリュックサックづくりにも挑戦したい、ものまねでなく地元の本物の素材にこだわり自分の頭で考え作っていききたい、昔のものを何とか残しながら新しいデザインを取り入れていききたい、そして手づくり教室を通じて子供達に伝承していききたい、と大きく夢をふくらませる。

階さんは、心強い援軍を得て、細かな辛抱のいる手作業に一段と力が入る。自然な動きに見えて芸術的な達人の技である。(齊藤 静夫)

工房の名称／

雫石民芸社

業種／

わら細工



●代表者／階 美栄子

●設 立／昭和45年

●従業員／3名

●所在地／岩手県盛岡市繁字尾入野64-102

●電 話／019-689-2279

●F A X／019-689-2279

●E-Mail／なし

【工房の紹介】

紺紵の野良着に編み笠姿の「雫石あねこ」。南部美人の代表とも言われますが、健康的なその姿を、今日ではほとんど見ることはできません。「雫石あねこ」「さんさ踊り」「忍び駒」「えじこ」などを人形にして、心温まる農村文化を長く後世に伝えようとこの仕事に入りました。人形の体となる部分には、自分の所で作った稲のわらを使用しています。

【代表者の抱負】

手づくり村の皆様や関係者の支援、家族の協力でここまでやってこられたことに感謝している。入村して20年、人気の高い人形のほか、手間のかかる編み笠や鶴・亀、忍び駒、くるみカゴなど、地元の本物の素材や自家栽培の花などにこだわり、心をこめて作ってきた。売れると補充するのに時間がかかり、ご迷惑をかけることもあった。今後は、娘が目指す新しい素材やデザインの手づくりへの挑戦を支えつつ、お客様が喜ぶ商品を作り続けてまいりたい。

【作品・工房の作業風景】



雫石あねこ、さんさ踊り、忍び駒、えじこ、わらじ、リースなど



お わ り に

この報告書をまとめるに当たって、何度か盛岡手づくり村を訪れた。盛岡市の中心部から車で30分足らずの距離であるから、「ほんのひとっ飛び」といった感じである。土曜・日曜日はもちろんのこと、ウィークデーにもここを訪れる観光客は結構多い。もちろん最盛期（昭和63年～平成3年）に比べると半減している事実は重いが、決して悲観するほどのことではない。開業20年を期して、関係者みんなで知恵を出し合って今後の振興策を話し合い、それらを実行に移すことによって充分巻き返しを図ることが可能である。

この調査報告書にもいくつかのアイデアを提供しているが、これらはほんの思いつき程度のものでしかないかもしれない。むしろこれらをたたき台にして、関係者による具体的な話し合いの場を持ってもらいたいと思う。

最近は大規模観光バスを連ねての団体旅行が減り、マイカーによる家族連れやグループ旅行、さらには若いカップルのドライブなどが増えている。受け入れ施設側がこのような変化にいかに対応するかが問われている。また、インターネットによる的確な情報の提供や、通信販売への対応にも積極的に取り組まなければ時代遅れになってしまう。

もはや、「ここは地場産業の生産施設であり、観光客の受け入れは本来の目的ではない」などと言ってはられない。できるだけ来場者を増やし、売上増強につなげる施策に振興センター、手づくり工房が一体となって取り組まなければならない。とくに各工房の経営者に望みたいことは、自らの力でお客様を惹きつけるための努力をしていただきたいということである。

観光施設が発展するためには、遠くからの観光客も必要であるが、それと同時に近くのリピーターへの対応も欠かせない。そのためには、つねに目新しい施策やイベントへの取り組み、さらには新製品の開発や、清潔な環境の保持、顧客をなごませる接客対応など、取り組むべき課題は多い。

今回の取材や打ち合わせなどを通じて、振興センターや工房の皆様にたいへんお世話をいただいた。お忙しいなか、時間を割いていただいたことに対し、心から感謝申し上げたい。

この報告書が、盛岡手づくり村の振興に幾分でもお役に立つとすれば、これに過ぎる喜びはない。今後の発展を祈念して、報告書の締めくくりといたしたい。

平成18年1月

社団法人中小企業診断協会岩手県支部

支部長 宮 健

平成17年度マスターセンター補助事業

「開業20年を迎える盛岡手づくり村」に関する調査報告書

2006年1月発行

編集・発行：(社)中小企業診断協会岩手県支部

支部長 宮 健

〒020-0023 盛岡市内丸14-8

岩手県中小企業団体中央会内

Tel (019) 624-1363 Fax (019) 624-1266

写真撮影・印刷・製本：株式会社 吉田印刷

〒020-0016 盛岡市名須川町23番27号